
東方核争奪-仮面ライダーオーズが幻想入り-

バームクーヘン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方核争奪 - 仮面ライダーオーズが幻想入り -

【Nコード】

N1104W

【作者名】

バームクーヘン

【あらすじ】

ある日、幻想郷に映司とアंक。そしてコアメダルが幻想入りしてしまった。

その日を境に勃発するコア異変。

異変を解決するため、コアメダルを回収するため。

オーズとアंकの戦いが始まる！

ブローグ・映司とアंकと幻想入り（前書き）

オズの最終回が迫って来たので、書いてみることにしました！

では、早速本編をどうぞ。

プロローグ・映司とアंकと幻想入り

幻想郷。

そこは今は忘れ去られた物や妖怪が訪れる世界。

そんな世界に、迷い込んだ者達がいた。

二人は焚火に向かい合う形で座っており、一人は魚を焼いていた。

魚を焼いている男は優しく穏やかな印象を持たせ、今も楽しそうに魚を焼いていた。

「でも近くに川があつてよかつたな。危うく飢え死になる所だったよ」

火野映司ひのえいじは焼き上がった魚を向かいにいる男に差し出した。

「ほらアंक。腹減つただろ？」

「あの野郎、帰ったら覚えとけよ・・・」

アंकは映司の手から魚をつかみ取ると、魚を乱暴に噛みちぎり愚痴をこぼす。

「大体こんな訳の分からないところに飛ばされてよくヘラヘラしてられんな」

「何処だって同じだよ。地球にいるのに変わりないんだから」

「はっ！本当に同じ地球だか」

アングの悪態に映司は疑問を持った。

「どういう意味？」

「さあな」

映司は不思議に思いつつ取り合えず魚を咀嚼した。

「色々落としちゃったけど、これは無事で良かった」

映司は腰から大事な物・・・オーズドライバーを取り出した。

「後はメダルか・・・」

アングは再び魚を食べる。

「・・・ん？」

夜の空を一人の少女が飛んでいる。

黒い髪にワンピース。

全身を黒に包んだ少女の背中には赤と青の奇妙な形をした羽が生えていた。

彼女の名前は封獣ぬえ。

妖怪の種族は鵂。

鵂とは鎌倉時代から伝わる妖怪で、その正体は不明とされている。

そんな彼女は、地面に何かが落ちているのに気が付いた。
何かがキラリと輝いた。

「何コレ？」

そこには四角い石の様な物と三枚のメダルが落ちていた。メダルは赤黄緑の三色があった。

ぬえは石に触れてみる。

すると石は輝き始め、ぬえは目を覆った。

やがて光は収まり、恐る恐る石を見る。

そこには石は無く、別の物に変わっていた。黒を基調とした変な物で、何やらメダルを入れられそうな箇所が三つある。

オーズドライバー

映司が持っているオーズのベルトと全く同じ物だった。

ぬえはそれを手に取ると、腹に当ててみる。
するとベルトが伸びてぬえに装着された。

「おお・・・」

続けてぬえは落ちている三枚のメダルを拾った。
ベルトと同じく興味が出て来たのだ。

その時、ぬえは自分の体に電流が走ったかのような衝撃を受けた。

そして、三枚のメダルをベルトに挿入する。
すると、右腰に付いていたオースキャナーが独りでに浮かび、挿入されたメダルをスキャンする。

「・・・変身」

タカ・トラ・バツタ！

タ・ト・バ、タトバ、タ・ト・バ！

第1話Aパート - 紛失と命蓮寺とメダルの暴走

ある日、映司とアंकは鴻上ファウンデーションに来るよう鴻上会長に言われ、鴻上の元を訪れていた。

「で、何だ用つてのは」

アंकが鴻上に尋ねる。

半ば無理矢理連れて来られたせいで機嫌は最悪だった。

そんなアंकの機嫌など露知らずで、鴻上は話を始める。

「何、用と言うのは実に単純だ！君達には色々お世話になっているからね。どうか疲れを癒してあげたい！」

鴻上は指を鳴らすと、近くにいた里中が何かを隠している布を引っ張る。

そこには、見慣れぬ装置が置かれてあった。

「あの一、一体これは・・・」

映司が尋ねると、鴻上はニコニコと嬉しそうに答えた。

「これはセルメダルの力を使って中にいる者の疲れを癒すマッシーンだよ！素晴らしいと思わないか！！」

「そ、そうですね」

鴻上の迫力に押されて映司は思わず答える。
アंकは反対に呆れ返る。

「お前、馬鹿か」

「さあ！入りたまえ！」

鴻上が装置に二人を奨めるが、アंकは踵を返して帰ろうとする。

「逃がさないよ！里中君！」

鴻上が合図した瞬間、里中が二人を掴んで装置へ放り投げる。
二人は抵抗する間も無く装置の中に閉じ込められる。

「おいコラふざけんな！」

アंकが装置の壁をドンドン叩くが、装置はびくともしない。
そして里中は二人の入ったカプセル型の装置から伸びたコードの先にあるパネルを操作して装置を起動する。

「さあ好きなだけリフレッシュしてくれたまえ！」

装置が光り出し、部屋中をまばゆいばかりの光が包む。

「里中君！調子はどうだね！！」

鴻上が尋ねると、里中はパネルをいじりながら答える。

「何か外部から不正干渉されてます」

「何と！外部と繋がっていないはずのこの装置に！」

「ちょ、ちょっと待ってください・・・！」

映司とアंकが装置から出ようとした瞬間、今までと比べようのない強い光が発生し、鴻上と里中は共に目を手で覆った。

やがて光は止み、鴻上は目を開ける。

しかし、装置の中に二人はおらず、完全に姿を消してしまった。

暫く鴻上は黙っていたが、突然大声で叫びはじめた。

「二人が消えてしまった！WONDERFUL！アンビリーバボー！
！素晴らしい！！！」

興奮している鴻上を余所に、里中は散らかった部屋を片付け始めた。

そして二人が気が付いた時には見知らぬ所へ飛ばされていた。
ただ飛ばされただけならどうにかなるのだが、厄介な問題があった。

「映司、お前本当にコアがどうなったか見てないのか」

「だから、見てたらとっくに集めに行ってるって。俺だってメダルは放って置けないし」

そう、二人は飛ばされた際に大量のコアメダルを無くしてしまったのだ。

「誰かがメダル盗んだのかな？」

「はっ、お前の紫のメダルを盗める奴がいるなら見てみたいもんだ」
アंकはそう切り捨てた。

確かに映司の中にある紫のメダルを抜き出すのは容易ではない。
誰かがメダルを盗んだという可能性は薄い。

「じゃあ、何でメダルは無くなったんだろう」

「それより早いとこメダル集めるぞ。今はこれしかないんだぞ！」

アंकは怪人態にした右腕を映司に見せる。

今映司達が持っているコアメダルはアंकを形成しているタカメダル一枚のみ。

それ以外は全てなくしてしまった。

「・・・メダルの気配だ」

アंकはそう眩き、走り出した。
映司も慌てて追い掛ける。

アंकは視界の隅にコアメダルが移ったのを確認し、手を伸ばす。
その手がメダルに触れる直前、誰かの手と重なった。

「あ？」

「ん？」

アंकは自分と手が重なった人物を睨みつける。

灰色の髪に頭に鼠の耳を生やした少女。

ナズーリンが目をパチパチさせてアंकと目を合わせた。

「なるほどね。それであんな必死な顔してたのか」

ナズーリンは映司とアंकの二人を連れて命蓮寺に向かっていた。

映司とアंकはナズーリンに自分達のことを話し、逆にナズーリンからここ幻想郷のことを聞かされた。

「幻想郷かー。まさか、こんな世界があるなんてね」

「他のライダーの世界があるわけだからな。別におかしくはない・
しかし、そうなると話合つな」

「話って何の？」

映司が尋ねると、アंकは右腕を怪人態にし、数メートル先の地面へ炎を放つ。

火の玉は地面に当たると爆発し、辺りに煙を出す。

映司とナズーリンは啞然とする。

「コアメダル一枚でこれだ。メダルの力が何倍にも膨れ上がってる」
「どうして？」

映司はアंकに尋ねる。

アंकは暫く考えた後に答えた。

「さあな。ただ、メダルのエネルギーの源は欲望。此処が化け物の
集まる箱庭ってんなら、人間の欲望を遥かに凌ぐ欲望が溢れてても
おかしくないだろうな」

「それに触れて、メダルが変質したってこと？」

「さあな」

「まあ、此処には確かに欲張りな連中は多いだろうね……おつと、着いたよ」

ナズーリンは足を止めて、二人を見ながらある場所を指差した。二人はその先にある建物を見る。

そこには一つの寺がそびえ立っていた。

「ようこそ、命蓮寺へ」

「なるほど、それでここを訪ねて来られたんですね」

二人の話聞き、ナズーリンの主当たる人物、寅丸星が頷いた。

「ああ、だから早くメダル寄越せ」

「アंक、いきなりそんなこと言うなよ」

今にも星に襲い掛かりそうな雰囲気なアंकを宥め、映司は星とナズーリンに頭を下げる。

「構いませんよ。貴方達の言う通りなら、私達が盗んでいるような

物ですからね」

星はそう言うと、後ろから小箱を取り出し、蓋を開けてアंकクに差し出した。

そこにはさつきとは別のコアメダルが入っていた。

アंकクはそれをつかみ取る。

またしてもアंकクが粗暴な振る舞いをしたので映司は苦笑いする。星とナズーリンも苦笑した。

その時、ナズーリンが何かに気づいたのかアツと声を挙げた。

「そういえばご主人、昨日ぬえがメダル持って来てなかったっけ」

ナズーリンの言葉を聞いて、映司とアंकクは驚いた。

「何っ・・・それは本当か!？」

アंकクが聞くと、ナズーリンは首を縦に振り、星が話し始めた。

「今お渡ししたメダルは今朝私が拾った物ですが、昨夜には、ぬえがメダルを三枚持って帰って来たんです」

「で、それと似たメダルがないか私がダウジングしている所で君達と鉢合わせしたって訳だ」

ナズーリンの補足を聞き、映司は考えた。

コアメダルは誰かが盗んだのではなく、幻想郷に散らばってしまった

たかもしれないと。

そんな映司よりも先にアंकは立ち上がり、映司の腕を掴んで立ち上がった。

「今はこの二枚しか使えるメダルはない。三枚も持ってるっていうんならとつととぶん取りに行くぞ。」

アंकはそう言ってさっき貰ったメダルを見せる。

確かに今はアंकのメダルを使う訳にはいかないし、この二枚のメダルではアंकのタカメダルを使ってもオーズに変身できない。

星とナズーリンが立ち上がり、二人に付いて行こうとした瞬間、

近くで爆発音が聞こえた。

何事かと思い、音のした方にたどり着くと、そこには崩れ去った門があった。

そして、煙の中から一人の少女が現れた。

「ぬえ・・・」

そこにいたのは間違いなく封獣ぬえだった。

「コイツか……」

アंकはメダルの持ち主であろうぬえを睨みつける。

「……」

ぬえは何も話さない。

「一体どうしたんですか？」

映司はぬえの様子がおかしい気がして、星に尋ねるが、星も困った顔をした。

「いえ……昨晚も妙に静かでした」

「おい！メダル持ってんのは分かってんだ！さっさと寄越せ！！」

その時、ぬえは自分の腹に何かを当てた。

それは……

「オーズのベルト!?!」

映司は慌ててポケットをまさぐる。

映司のドライバーは、ちゃんとある。

「どっぴいっこと……?」

「お前、それを何処で」

映司とアングの驚きを無視し、ぬえは何か呟いた。

「私の・・・あたしの・・・アタシのメダル・・・！」

ぬえのポケットから三枚のメダルが浮かび上がり、ドライバーに挿入される。

ドライバーは独りでに傾き、オースキヤナーが意思を持ったかのように動いてメダルをスキヤンする。

タカ！トラ！バツタ！

タ・ト・バ、タトバ、タ・ト・バ！

歌が流れたかと思うとぬえの周りにメダルの形をしたエネルギーが集まり、やがてぬえの姿が変わった。

赤色のタカのマスク。

黄色いトラの胴体。

緑色のバツタ足。

それらを模した仮面の戦士。ぬえはそれに変身した。

「なあ、これって君達が言っていた・・・」

ナズーリンが二人に尋ねた。
アंकと映司はそれに答える。

「ああ。欲望のメダル、コアメダルで変身する正に無限に等しい戦士……」

「仮面ライダー……オーズ」

第1話Bパート・説得と変身と降ろす腕

「うおおおおおお!!!!」

ぬえが変身したオーズは咆哮した後、映司達を睨みつけ、ジリジリと歩み寄って来る。

「お、おい。君達が何とかしてくれよ」

ナズーリンが映司とアंकに頼む。

確かに映司とアंकが当事者だが、二人にもどうすることも出来ない。

「はあっ!!」

オーズは両腕のトラクローを展開し、四人に飛び掛かる。

四人はそれぞれ別方向に飛んで避けるが、オーズはすかさず襲い掛かる。

狙われたのはナズーリンだった。

「くっ!!」

ナズーリンはかわせない事を悟っていた。
ここまでか・・・そう思った時

「やめなさい！」

星が二人の間に割り込み、オーズと向かい合った。
オーズのトラクローは星に触れる直前で止まる。

「ご主人・・・」

ナズーリンは自分の目の前に立つ星を見上げる。

「ぬえ、やめなさい」

星は再びオーズに制止の声を掛ける。

オーズは暫く沈黙していたが、やがて苦しそうに悶え始めた。

「う、うううう・・・」

オーズは頭を抱え、呻き声を挙げる。

だが、それでも抑え切れずに二人に襲い掛かる。

「うおおおおおおおおお！！！」

星はナズーリンを庇うように抱きしめる。

襲い掛かるトラクローが二人を切り刻む。

その手前で、映司がオーズの手を掴んで食い止めた。

「もう、やめよう」

映司はオーズに呼びかける。

オーズは苦しみながら映司を睨みつける。

「大切な人達なんでしょ？だから、さつきも必死になって抑えてた」
メダルの力で暴走した時、それを押さえるのは相当な苦しみが伴う。
だから、そうしてまで暴走を止めようしたのはよっぽど二人が大切
だったからだろう。

「なら、傷付けるのは絶対駄目だ。・・・俺、分かるんだ。自分の
手が誰かに届かなかつたら凄く悔しい」

映司は自分の過去を思い出していた。

あの日、仲良くなった少女を内戦で守れず、自分の小ささを後悔し
たあの日を。

「でも、自分の手で大事な人を傷付けたらもつと辛い。自分の手が
憎くなって。でも自分の手はそれしかないから・・・」

「・・・・・・・・」

オーズの動きが止まる。

二人を狙っていた腕が震え始める。

「だから、本当に大事だったら・・・その手で握り潰したら駄目だ。そっと大事にするために・・・手を、降ろそう」

オーズの・・・ぬえの腕はそっと降ろされた。

変身は解除され、ぬえはその場に倒れ掛かる。
映司は慌ててぬえを支える。

星は倒れたぬえに呼び掛ける。

「ぬえ、大丈夫ですか」

ぬえは映司の腕の中で目を覚ます。
星の顔を見て、ゆっくりと首を縦に振った。

そして、映司に顔を向けた。

「暴れてた時のことも覚えてる・・・貴方の声、ちゃんと届いてたから」

「・・・そう。良かった」

映司は安堵の表情を浮かべた。

「あの・・・貴方、名前は？」

「俺は映司、火野映司。こっちはアंक」

映司は自分と隣にいるアंकを紹介する。

「映司・・・映司、映司・・・」

ぬえは繰り返して映司の名前を呼ぶ。

何故自分の名前だけ呼ぶのか映司は不思議がり、ナズーリンは隠れて笑い出した。

星は思わず苦笑いする。

「おい映司、いちゃついてないでとつととメダルを・・・」

アंकが二人に詰め寄った瞬間、ドライバーに収まっていた三枚のコアメダルが飛び出した。

アंकは急いで飛び出したコアメダルを掴む。

その時、ぬえの体から大量のセルメダルが飛び出した。

セルメダルは五人から少し離れた場所に集まり、やがて形を成す。

その姿は猿の頭と毛、虎の頭と体、そして蛇の尻尾・・・
鶴ヤミーが現れた。

「どうしてヤミーが！グリードはいないのに・・・」

「成る程、メダルの変質がこんな形で現れたか」

「え？」

アंकは落ち着いた様子で鶴ヤミーを見据えた。

「恐らく、暴走したコアがコイツの中でヤミーを作り、寄生したままヤミーが育ったって訳だ」

「別に欲望を叶えた訳じゃないのに・・・」

映司はぬえを星に預けると立ち上がり、アंकの隣に並んだ。

「これでお前も尚更必死でメダルを集めなきゃいけなくなったな」

「別に、こんなことなくてもメダルは回収するさ」

アंकは星とナズーリンから貰ったメダル、そしてタトバの中の内の一枚のメダル。

計三枚のコアメダルを映司に突き出す。

「あいつがどんなヤミーかは覚えてるな」

「ああ」

「なら、こいつでさっさと決める」

「成る程ね」

映司はアंकからメダルを受け取り、腰に装着したオーズドライブに挿入する。

「変身！！！」

ライオン！トラ！チーター！
ラタラタツ、ラトラーター！

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

映司を中心に灼熱を帯びた光が放たれる。

その場にいる全員が直視出来ずに目を手で隠す。

アंकとぬえ、鶴ヤミーは光が若干収まったので映司を見る。

そこには映司はいなかった。

そこにいるのは灼熱の戦士。

誇りあるライオンの鬣。

迷いに爪を立てるトラ。

大地を駆け抜けるチーター！

音速以上の速さで全てを照らし、獲物を狩る黄金の灼熱コンボ。
仮面ライダーオーズ、ラトラーターコンボがその姿を現した。

オーズはトラクローを展開し、鵺ヤミーに跳び掛かる。鋭い爪が鵺ヤミーを切り裂き、切られた箇所からセルメダルがこぼれ落ちる。

何度かヤミーを切るとオーズは鵺ヤミーを蹴って飛び上がり、鵺ヤミーの肩に手を置く。

それを支えに鵺ヤミーの腹をチーターの駿足の足で蹴りつつける。

視認出来ない速さの連続キックは鵺ヤミーに大きなダメージを蓄積させる。

鵺ヤミーは反撃で尻尾の蛇をオーズにけしかける。

オーズは鵺ヤミーを踏み台にして跳び上がり、蛇を避ける。

そして、頭からまばゆい光を放ち、蛇を焼き消す。

そして、トラクローから爪型の衝撃波を飛ばして鵺ヤミーを吹き飛ばす。

「映司！そろそろとどめ刺せ！！」

アंकがオーズに指示する。

オーズは腰に装着されているオースキャナーを掴み、メダルをスキャンする。

スキャンングチャージ！！！！

オーズと鵜ヤミーの間に黄色の輪が三つ現れる。

オーズはそれをくぐり抜け、鵜ヤミーをX字に切り裂く。

しかし、鵜ヤミーはガツシユクロスに当たる直前に地面を飛び立ち、ギリギリで回避する。

外した・・・と三人は焦ったが、アंकは動じない。

オーズはすかさずオースキャナーを掴み、再びメダルをスキャンする。

スキャニングチャージ!!!

そして、今度は灼熱の光を頭から放つ。

「セイヤーッ!!!!!!!!!!!!!!」

必殺のライオディアスが鵜ヤミーを焼き尽くす。

「ぎゃあああああああ!!!」

鵜ヤミーは断末魔の叫びを挙げ、爆発した。

オーズの頭上から、鵜ヤミーの残骸のセルメダルが降り注ぐ。

映司は変身を解き、その場に崩れ落ちる。

ぬえは映司の元へ駆け寄り、映司に話し掛ける。

「大丈夫？」

「うん、何とか・・・でもあれ、いつもよりなんかキツイ・・・？」

映司が疲労困憊している中、アंकが告げる。

「メダルの方が何倍にも膨れ上がったんだから疲労も倍になんのは当たり前だろ」

「お前、そういうの先に言えよ・・・」

映司の言葉には耳を貸さず、アंकはドライバーのコアメダルを回収するとメダルケースに収納した。

集まったメダルは、

タカ 2枚

ライオン

トラ

チーター

バッタ

二人のメダル回収は続く。

第1話Bパート・説得と変身と降ろす腕（後書き）

オーズも最終回を迎えました。

一年間、楽しむことが出来て本当に良かった。

核争奪のオーズがいつ頃の話かというところ、どの時期でも矛盾が出て来るのでパラレル扱いです。

深く考えずに読んで頂けると幸いです。

第2話Aパート - 探索と剣と新オーズ

前回の東方核争奪、三つの出来事！

一つ、映司とアंकが幻想入り。命蓮寺に向かう！
二つ、ぬえがオーズに変身。メダルが暴走する！
三つ、メダルの暴走から現れた鶴ヤミーを映司のラトラーターコンボが倒した！

C o u n t T h e M e d a l s

現在、オーズの使えるメダルは！

タカ 二枚

ライオン

トラ

チーター

バッタ

鶴ヤミーを倒した翌日、ナズーリンは命蓮寺の見回りをしていた。

頼まれた訳ではないが、昨日のようなことがあると、やはり警戒は怠れない。

映司とアंकはぬえを助け、ヤミーを倒したこともあり、お礼とまでは言わないが命蓮寺に身を寄せることになった。

そして、縁側を歩いているとアंकに鉢合わせした。

挨拶だけして通り過ぎようとしたが、ナズーリンの目に信じられない物が映った。

「君、その手に持っているのは……」

「ああ、アイスだな。この世界にもあるんだな」

「あのね、それは外の世界の物で貴重なんだ。勝手に食べないでくれ……あ、ぬえ。君も来てくれ」

ナズーリンはぬえを呼び、ぬえはフワフワと飛んできた。

「どーしたのー……って、何勝手にアイス食べてんのよ」

「俺が食べたい時ぐらい食べさせる。映司はこんなことでグダグダ言わないぞ」

アंकは二人の文句を聞き流すが、映司が後ろから出て来てアイスを取り上げる。

「俺が金払ってるんじゃないんだから、ここのアイス食べたら駄目だろ」

映司に言われアंकは舌打ちをする。

その様を勝ち誇ったかの様にナズーリンとぬえが笑う。

その時、何者かの気配を感じてアंकが振り返る。

そこには、クズヤミーがゾンビの様にフラフラと近付いて来ていた。

「クズだから気付くのが遅れたか」

「アंक、メダル！」

映司はアंकにメダルを要求し、アंकはメダルを三枚投げる。

アंकの投げたメダルは映司を通り過ぎ、ぬえが慌てて受け取る。

「え、おいアंक」

映司は自分にメダルを渡さなかったアंकに真意を問う。
アंकは答えた。

「コイツがオーズになったのが偶然かどうか、確かめる」

アंकが映司をオーズにしたのは偶然だった。

しかし、映司はオーズの器として最高に等しい力を見せた。

同じ偶然なら賭けてみる価値もあるし、オーズが二人いればメダル回収が楽になると考えてのことだった。

「いや、でも……」

「いいから早くやれ！」

映司は気が乗らないが、アंकは変身を催促する。

ぬえは少し考えたが、ドライバーをセットしてメダルを挿入する。

右手で握ったオースキャナーを宙に浮かして左手に持ち返し、メダルをスキャンする。

「変身！……！」

タカ！トラ！チーター！

ぬえはオーズ、タカトラーターに変身した。

オーズはトラクローを展開し、一瞬でクズヤミーに接近する。

チーターの足で翻弄しながらトラクローでクズヤミーを引っ掻く。

クズヤミーもまげじとオーズに殴り掛かる。

タカの視力でクズヤミーの攻撃を見極め、隙を突いて高速キックを

浴びせる。

クズヤミーは耐え切れずに転がって行く。

スキヤニングチャージ!!!

チーター足のジェット噴射で急激に加速し、そのスピードを合わせた飛び蹴りをクズヤミーに繰り返す。

「セイヤー!!!」

黄色のエネルギーを纏ったキックはクズヤミーを撃破した。

ぬえは変身を解き、映司達の元へ戻る。

「どっ?」

「まあまあだな」

アंकはそう言ったが、実際は概ね期待通りの戦闘だった。もしかしたら期待以上と言っても言い過ぎではないかもしれない。

何も言わずともメダルの特性をいかしたぬえの戦闘にアंकは満足していた。

「アंक、メダルが何処にあるか本当に分かるのか？」

「ああ、だから黙って歩け」

アंकはそう二人に指示した。

失くなったコアメダルを回収するため、アंक、映司、ぬえの三人は森を探索していた。

「ぬえちゃん、ごめんね。なんか付き合わせちゃって」

「あ、き、気にしなくていいから」

映司がぬえに申し訳ないと思って謝ると、ぬえは慌てて答える。

「そ、それにほら、やっぱり帰る時私がいた方が良いでしょう？」

ぬえは何とか取り繕う。

「それにしても凄いよぬえちゃん。俺なんか初めてオーズになった時はメダルの力がまだ良く分からなかったし。あ、そういえば掛け声が同じだったね、セイヤー！！！！って」

「あ、それはあの・・・偶然、よ。そう偶然。奇遇ねえー」

ぬえは頬を少し赤く染めると笑顔でそれをごまかす。映司はそれに気づかずぬえに「そっかー」と微笑む。

ぬえは映司の笑顔を見て顔中を赤く染めた。

アंकはその様子を見て呆れた。

「何やってんだか……ん？」

アंकはメダルの気配を感じ、映司達を呼ぶ。

「おいこつちだ！とつと来い！」

映司とぬえはアंकを追って走り出した。コアメダルを求めて、三人は走り続けた。

「はあ、はあ、はあ……」

森の中を緑髪の少女、リグル・ナイトバグが走り回っていた。

彼女の後ろにはカマキリヤミーがついて来ていた。

リグルの体力は限界に近付き、息切れしてくる。

やがて限界が来て、リグルはその場に倒れ込む。

カマキリヤミーは容赦なくリグルに襲い掛かる。

もう駄目だ・・・トリグルが思った瞬間、カマキリヤミーの体に炎がぶつかりカマキリヤミーは吹っ飛んだ。

アंकが炎を飛ばしてカマキリヤミーを吹っ飛ばしたのだ。
アंकは映司にメダルを投げ、映司はメダルを入れて変身する。

「変身！！！！」

タカ！トラ！バツタ！

タ・ト・バ、タトバ、タ・ト・バ！

映司はオーズに変身し、トラクローを展開してカマキリヤミーに仕掛ける。

カマキリヤミーは腕の鎌で応戦し、トラクローと激しく火花を散らす。

時々蹴りを交えての互角の戦いが繰り広げられ、互いの武装を同時に喰らい正反対に転がる。

「く・・・オーズ！」

「このままじゃキリがない・・・ん？」

オーズは自分の足に何か当たったのに気が付いた。

何かと思って拾うと、それは見馴れた物だった。

「メダジャリバー！こんな所に・・・」

「まあ、あんな物使うのオーズぐらいだからな」

アंकはそう考えた。

幻想郷は忘れ去られた物が訪れる世界。

オーズが消えた元の世界で、メダジャリバーを熱心に覚えている連中などいないだろう。

「まあいいや。これなら勝てる！！」

オーズはメダジャリバーを握り、カマキリヤミーに突っ込む。

飛び掛かって来たカマキリヤミーをオーズはジャリバーで受け流し、振り向き様に切り付ける。

カマキリヤミーはオーズに斬りかかろうとするが、リーチの差が圧倒的なため、オーズに攻撃が届かない。

オーズはバツタの力でカマキリヤミーを思いつ切り蹴り飛ばす。カマキリヤミーは大木に叩き付けられ大きなダメージを負うが、尚もオーズに向かって来る。

オーズはメダジャリバーにセルメダルを三枚装填し、オーズキャンナ
ーでメダルをスキャンする。

トリプル！！スキャンングチャージ！！！！

「セイヤーッ！！！！」

メダジャリバーは銀色の光を纏い、オーズは目の前に迫って来たカ
マキリヤミーを真つ二つに切り裂いた。

カマキリヤミーの体は空間ごとズレたが、やがて空間は元に戻り、
元に戻った瞬間に爆発して辺りにセルメダルが撒き散らされた。

映司は変身を解き、セルメダルを拾っていく。

その時、映司はある物を見つけて驚愕した。

「アंक、これ！」

映司が拾ったのは、カマキリのコアメダルだった。

アंकはそれを奪い取り、マジマジと見る。

「確かに、コアメダルだな」

「まさかヤミーからコアメダルが出るなんて」

「恐らく、コアメダルからヤミーが出来たんだろうがな」

アंकはそう言いながらカマキリメダルをホルダーに仕舞う。

ぬえは呆然としているリグルに近寄り声を掛けた。

「大丈夫？」

「あの、さっきのメダル……」

リグルは何か言いたそうとしているが、上手く言えずにいた。

「お前、何か知ってるのか」

アंकが詰め寄ると、リグルが恐る恐る答えた。

「私、それ持ってる人……知ってるかも」

第2話Bパート・暴君と約束とWオーズ

「誰だ、そのコアメダルを持つてる奴は」

アंकがリグルに詰め寄る。

映司とぬえはリグルが怯えていたのでとりあえずアंकを引き戻す。

何とか落ち着いたりリグルは、詳しく話し始めた。

「最近、霧の湖にいる友達の妖精の子が湖が暑くなってきたって・
・で、その少し前にメダルが流れ着いてたのを紅魔館のメイドの人
が拾ったのを見たって」

リグルはおどろおどろに言った。

「紅魔館って？」

映司はぬえに尋ねた。

「霧の湖の近くにある吸血鬼の館よ・・でもあの吸血鬼度々騒ぎ
起こしてるからコアメダルが原因とは限らないわよ」

ぬえがそう言うと、映司とアंकはリグルを見た。

リグルはその目に耐え切れずに抗議した。

「ほ、本当よ！だってその吸血鬼、昼間に空を飛び回ってたもの！」

それを聞いて映司とぬえは顔をしかめた。
吸血鬼が昼間に空を飛ぶのは明らかにおかしい。

「なるほどな、それはコアメダルだな。しかも俺のだ」

「え、何で分かったの？」

映司はアंकに尋ねた。

アंकは当然だといったげに答えた。

「吸血鬼が太陽の熱に耐え切れる力を得たんだ。属性は火・・・力ザリのライオンは俺達が持っている以上、俺のクジャクしか考えられない」

映司はなるほど、と感心した。

「話をついた。さっさと行くぞ！」

「ちょっと待って」

ぬえはアंकを引き止め、アंकは何だと嫌そうな顔をする。

「その、メダルを良く見せて欲しいなーって・・・ほら、何枚あったか忘れちゃって」

アंकは舌打ちするとホルダーを開けてぬえに見せる。

「タカ、ライオン、トラ、チーター、カマキリ、バッタ。六枚だ、覚えとけ!!!」

ぬえが見終わるとアंकはホルダーを閉じる。

「で、紅魔館つてのは何処だ」

「あっちに行けば湖があるから、そこまでいけば分かると思う」

それだけ聞くと、アंकはリグルが指差した方向に走り出した。映司は慌てて後を追う。

リグルは誰もいなくなったと安心したが、ぬえがまだ残っていることに気が付いた。

「どうしたの？二人とも、行っちゃったよ？」

「貴女、コアメダル持つてるでしょ」

ぬえに言われてリグルは思わずポケットに手を入れる。

ぬえはその腕を掴み、自分の前に持つてくる。

リグルの手には一枚のコアメダルが握られていた。

「どうして・・・」

「アंकは自分のコアに気を取られてたけど、貴女どこがおかしかったから」

ぬえはリグルがコアメダルについて話している最中、ずっと落ち着かない様子だったのに不信を抱いていた。

だから、リグルが何か隠していると思いついて待っていたのだ。

「……あの野郎」

アंकは憎しみを込めた声で愚痴を零す。

「どうした？」

映司が尋ねると、アंकはホルダーを開いて映司に見せた。

「あの妖怪、メダル抜き取ってやがった」

アंकの言う通り、メダルはタトバの三枚しか残っていなかった。

ホルダーの中を見せた時にぬえがメダルを抜き取り、正体不明の能力を使ってアंकを騙したのだろう。

「あいつメダルが目当てだったか……」

「まあまあ、ぬえちゃんにも何か事情があるかもしれないし」

映司は怒り心頭のアंकを宥めるが、アंकは機嫌を悪くしたまま歩いて行く。

そこで、映司はあるものを見つけた。

「アंक！あれ、ほら！」

映司が指差した場所には、ライドベンダーがあった。

二人は近寄って確認するが、やはりそれはライドベンダーだった。他にこんな自販機があるはずがない。

「良かった。バイクがあれば移動が大分楽になるよ」

映司はセルメダルを入れて、ボタンを押す。

すると、ライドベンダーは自販機からバイクに変形する。

映司がバイクに乗り、アंकは他にバイクがないので仕方なく映司の後ろに乗る。

二人は紅魔館に向かって進んで行った。

「私、全然力が無くて弱いから。それで、あの人達や怪物がメダルの力を使ってるの見て、私も強くなれると思って・・・」

リグルはコアメダルを隠し持っていた理由を話していた。

ぬえはそれを聞いて、リグルにハッキリ言った。

「貴女じゃ、コアメダルの力は扱えない」

「え？」

リグルは唐突にぬえが言い出したことに動揺していた。

「此処じゃコアメダルは持ち主に強い影響を与えるの。最悪暴走するわ」

「そんな・・・でも、あの人は人間なのに」

リグルは映司を引き合いに出した。

人間が暴走していかないのに、妖怪が暴走するとは信じられないのだろう。

「あれは、オーズだから」

「オーズ？」

リグルが聞き返すと、ぬえはコクリと頷いた。

「メダルを使って戦う無限の戦士・・・映司はその器だから」

「だったら、私もオーズになれば・・・」

リグルは口惜しそうに言った。

ぬえはそれを否定した。

「映司はオーズだからメダルを使える訳じゃない。それに・・・」

ぬえは視線をリグルから他へ移す。

すると、リグルを狙ってクズヤミーがぞろぞろとやって来た。

「ひっ！」

「コアメダルを持っていれば狙われる。その力は強大だから」

ぬえはドライバーをセットし、メダルを挿入する。

「変身！...！」

ライオン！カマキリ！チーター！

ぬえはラキリーターに変身し、頭から光を放つ。

クズヤミーはあまりの眩しさに手を翳してよろめく。

オーズは高速で走り回りながら腕のカマキリブレードでクズヤミー

達を切り裂いていく。

スキャニングチャージ!!!

オーズは高速でダッシュし、その勢いで回転する。

黄色い小さな竜巻となったオーズはクズヤミー達を斬り倒す。

クズヤミーは全員消滅し、ぬえは変身を解く。

ぬえがリグルを見ると、木にもたれて震えていた。

「あの二人は覚悟してる。これからヤミーとも、メダルで暴走した妖怪とも戦わなきゃいけない事に」

ぬえはリグルの腕を掴んで立ち上がらせる。

「そんな二人だから、私は力になりたい。オーズになってメダルを集めたい。それが、私の欲望」

「・・・」

ぬえはフツと微笑んでリグルの肩を叩いた。

「貴女は、メダルで暴走したい訳じゃないでしょ？」

「・・・約束して」

リグルの言葉を聞いて、ぬえは意図が分からず首を傾げた。

「コアメダルは私の手に余るって。貴女はコアメダルで暴走しない
って」

リグルは力強い目でぬえを見つめる。
ぬえはコクツと頷いた。

「そういえばアंक、何でオーズのベルトがもう一つあったんだろ
う?」

映司はバイクで走りながら後ろにいるアंकに尋ねた。
アंकは面倒気に答えた。

「別世界のオーズのベルトか、800年前の錬金術師共が予備のベ
ルトでも作ったのか・・・可能性はいくらでもある」

アंकがそこまで言った所で、紅魔館の目の前にまでたどり着いた。
二人はバイクを降りて紅魔館を見た。

その名の通り紅に染まった館は妖しい空気を醸し出していた。

その時、門から赤髪の女性が出て来た。

ヨロヨロと歩いていて、途中でボタンと倒れた。

「おい、お前メダル持つてる奴連れて来い」

「お前そんな無茶言うなよ。大丈夫ですか？」

映司は女性を揺さぶって安否を確かめる。

すると女性はアंकクに灰色のメダルを差し出した。

「お願いします・・・危険過ぎてもう持っていてられません」

アंकクは女性からメダルを取り、ホルダーに仕舞う。

その瞬間、女性の体が炎で吹き飛ばされる。

映司とアंकクは吹き飛ばされた女性を見るが、背後に誰かがいるのに気が付いた。

しかし、振り向いても誰もいない。

「困るわね、美鈴。 反逆だなんて」

映司とアंकクは空を見上げる。

そこには、例の吸血鬼・・・レミリア・スカーレットがいた。

レミリアの背中にはクジャクの美しい虹色の羽が生えていた。

「お前、俺のメダル返せ！」

アंकはレミリアに命令するが、レミリアはそれを一蹴する。

「馬鹿なこと言わないで。私は太陽を克服した。私は全てのコアメダルを集め、幻想郷の王になる！！」

レミリアは両手を挙げて高笑いしながら宣言する。

「アंक、やっぱりコアメダルで暴走してるよ！」

「ああ、しかも相当暴走が進んでるな」

「言えない・・・実は素とそこまで性格変わってないなんて言えない」

美鈴は映司とアंकに聞こえないように呟いた。

映司はアंकからメダルを受け取り、オーズに変身する。

「変身！！！！」

タカ！トラ！バッタ！

タ・ト・バ、タトバ、タ・ト・バ！

オーズはバッタの脚力でレミリアに向かって跳び上がる。

レミリアは腕に炎を宿し、向かって来るオーズを弾き飛ばす。

オーズは空中でバランスを整え、地面に着地する。

レミアアの背中の中クジャク羽が宙に浮き、それらはオーズに向かって飛んでいく。

オーズはメダジャリバーでそれをいなす。

レミアアは更にクジャクの羽を飛ばしていく。

オーズは防ぐのが精一杯で動けない。

レミアアはその隙を突き、炎を全身に纏って空中から体当たりをする。

オーズは体当たりを受けて突き飛ばされる。

レミアアは続けてクジャク羽を放つ。

アंकはその光景を見て舌打ちをする。

「くそっ、空に飛ばれたら手が出せないな・・・」

トリプル!!! スキャニングチャージ!!!

「セイヤーツ!!!!」

オーズは銀色に輝くジャリバーを振り、レミアアを空間ごと切り裂く。

しかし、レミリアはオーズバツシュをかわし、オーズを嘲笑う。

「えっ!？」

「ははっ 遅い遅い!!」

レミリアはクジャクの羽に炎を纏わせ、オーズに飛ばす。
炎が起爆剤になり、オーズや地面に触れた途端爆発する。

オーズは後ろに弾き飛ばされる。

何とか立ち上がったが、そこにレミリアが足に炎を纏わせてキックを放つ。

レミリアのプロミネンスドロップがオーズの腹に決まり、オーズのメダルが弾け飛んで変身が解除される。

アंकは右手を飛ばしてメダルを回収しに行く。
レミリアもメダルを取りに飛ぶ。

二つの腕が交錯し、それぞれの手にメダルが握られる。

アंकの手にはトラとバツタのコアメダルが。
レミリアの手にはタカのメダルが握られていた。

「貰ったわよ」

「お前・・・返せ!」

アंकの要求を無視し、レミリアはタカメダルを取り込む。レミリアは満たされた顔をし、全身から赤い衝撃波を放つ。

映司とアंकはそれに気圧される。

「はははははははははははははははははは!!!!力が、力が溢れる!!!もつともつと!!!」

「完全にいかれたな」

アंकは舌打ちをしてホルダーを見る。

しかし、今あるのはトラとバッタ。そして美鈴から貰ったゴリラのみ。

オーズに変身するには頭のメダルが足りない。

「さあ、残りのメダル全部貰おうか」

レミリアは二人に向かってゆっくりと足を進める。

「映司……!!!」

ぬえがりグルを連れて飛んできた。

アंकはぬえに怒鳴り付ける。

「お前！勝手にメダル持つてくな！！」

ぬえはアंकの勢いに押され、思わず後ずさる。

「う、ゴメン。でもほら」

ぬえはリグルに目配せする。

リグルはぬえにメダルを差し出す。

それは、クワガタのメダルだった。

それを見たアंकの表情が一変する。

そして映司とぬえにそれぞれ指示する。

「映司！バツタをアイツに渡せ！・・・おい、映司にライオンとチーター投げろ！！」

映司とぬえはアंकに言われた通りにメダルを投げる。

二人の投げたメダルが宙で交差する。

「させるか！」

レミリアは変身を阻止しようとしてクジャク羽を展開する。

そこにアंकが炎を飛ばしてレミリアの邪魔をする。

レミリアはアंकの炎を軽く払うが、その間に映司とぬえは隣に並び、変身を始める。

「変身!!!」

ライオン！トラ！チーター！
クワガタ！カマキリ！バッタ！

ラタラタツ、ラトラーター！
ガータガタガタキリツバ、ガタキリバ！

「はああああああああ!!!」

映司の変身したラトラーターは強力な熱光線を周囲に放つ。

ぬえの変身したガタキリバはジツと佇んでいたが、やがて雄叫びを
挙げた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおお!!!!!!!!!!」

黄金の熱光線と深緑の衝撃波が紅魔館と湖を震わせる。

「な、何・・・？」

レミリアは二人の圧倒的な威圧感。

特にガタキリバから発せられる力に呆然とした。

永遠に続くかと思われた咆哮に終わりが訪れる。

「はあっ!!!!!!!!!!!!!!」

二人のオーズが腕を振るうと黄金と深緑の光は消し飛び、二人の姿がハッキリと現れた。

どんな不安もかみ砕くクワガタ。
邪悪な闇を切り裂くカマキリ。
行き止まりすら飛び越すバツタ。

激しく火花を散らす深緑の最強コンボ、ガタキリバが現れた。

「く・・・今更！」

レミリアは全身に炎を纏い、二人に突っ込む。

その瞬間、ガタキリバは次々と分身していき、計50体のガタキリバがその場に現れる。

「はあ!?!」

レミリアはその異様な光景に目を疑い、その場に固まる。

アंकはその隙にライドベンダーからトラカンを出し、ライドベンダーをライドベンダーにする。

トライドベンダーは暴れ回り、紅魔館の扉を壊し回る。

ラトラーターは暴れ回るトライドベンダーに強引に跨がる。

ラトラーターが跨がった瞬間、トライドベンダーは大人しくなる。

「行くよトラちゃん！」

「ガオオオオオオオオオオオオオオ！」

トライドベンダーはレミリア目掛けて飛び掛かる。

「ええい！！！」

レミリアは両手に炎を纏い、トライドベンダーに突っ込む。

トライドベンダーはレミリアの両手に噛み付き、激しい火花を撒き散らせる。

「ハアッ！」

ラトラーターがトライドベンダーを強く振り、レミリアは地面に振り落とされる。

「くっ！」

レミリアは素早く立ち上がるが、そこをガタキリバが大勢で畳み掛ける。

レミリアはクジャク羽や炎でガタキリバを退けていくが、数が多過ぎる為、相手に仕切れずガタキリバの拳を頬にもろに喰らう。

その隙を突き、ガタキリバ達は一斉にレミリアに殴り掛かる。

レミリアはされるがままになっていたが、自分を中心に炎の衝撃波を飛ばし、ガタキリバ達を全員退ける。

ラトラーターはトライドベンダーの口から黄色のメダル型のエネルギーを放つ。

レミリアは攻撃を受けてよろめくが、まけじとクジャク羽を展開する。

そこにガタキリバ達が頭から電撃を放ち、クジャク羽を砕く。

レミリアも電撃を喰らい、ダメージを受ける。

ラトラーターはオースキャナーを掴み、ドライバーのメダルをスキャンする。

スキャンングチャージ!!!

「セイヤーッ!!!」

トライドベンダーとレミリアの間に黄色の輪が現れ、それをくぐる度にトライドベンダーが黄金に輝き、レミリアを突き飛ばす。

それを見て、ガタキリバ達もメダルをスキャンする。

スキャニングチャージ!!!

「セイヤーッ!!!」 「セイヤーッ!!!」 「セイヤーッ!!!」
「セイヤーッ!!!」 「セイヤーッ!!!」 「セイヤーッ!!!」
「セイヤーッ!!!」 「セイヤーッ!!!」 「セイヤーッ!!!」
「セイヤーッ!!!」 「セイヤーッ!!!」 「セイヤーッ!!!」
「セイヤーッ!!!」 「セイヤーッ!!!」 「セイヤーッ!!!」

ガタキリバ達が次々とレミアアにキックを浴びせる。

宙に浮いていたレミアアはキックの嵐によって吹っ飛ばされ、時計塔に叩きつけられる。

そのレミアアに、五人のガタキリバが同時にライダーキックを放つ。

「セイヤーッ!!!」 「セイヤーッ!!!」 「セイヤーッ!!!」
「セイヤーッ!!!」 「セイヤーッ!!!」 「セイヤーッ!!!」

ガタキリバのキックにより時計塔は崩れ落ちる。

地面に着地した最後の一人・・・ぬえ本体の元に分身していたガタキリバ達が戻っていく。

ガタキリバ一人に戻るとぬえは変身を解き、その場に崩れ落ちる。
ライターは慌ててぬえの元にダッシュし、ぬえの体を抱き留める。

映司は変身を解いてぬえに呼び掛ける。

「ぬえちゃん、大丈夫？」

「……はあっ……っ！あ……」

しかし、ぬえは大きく肩で息をし、全身から汗を流している。映司と話す気力がかけらも残っていないようだ。

そこで映司はあることに気付いた。

「そういえばぬえちゃん、コンボ使うの初めてだったっけ……」

ただでさえコンボの疲労はとてつもない物なのに、幻想郷では更につきつくなる。

崩れていく時計塔から、二枚のコアメダルがアングの元に降ってきた。

レミリアが持っていたタカとクジャクのコアメダルだ。

自分のコアメダルが帰ってきた為、アングの顔に笑みが宿る。

しかしそこで、アングはあることに気付いた。

このコアメダルが無くなれば、あの吸血鬼の体は元に戻り、太陽に耐え切れなくなるのではないかと。

その時、レミリアを抱き留め、日傘で日光から守っているメイドが現れた。

「誰だお前」

アंकがメイドに尋ねた。

「私は十六夜咲夜と言います。今回はお嬢様をメダルから解放して頂きありがとうございます」

咲夜と名乗る少女が、三人に頭を下げた。

アंकはリグルから聞いた話を思い出した。

「そいつにコアメダルを渡したのはお前か？」

「はい、こんな事態になると分かっていたら決して献上しなかったのですが」

咲夜の顔に影が宿る。

相当後悔しているようだった。

映司は何とか咲夜をフォローしようとする。

「でも、何ともなくて良かったじゃないですか」

「ええ、貴方達のおかげです・・・ただ」

そこで咲夜は崩れた時計塔に目を向け、再び映司に視線を戻す。

「やり過ぎです」

映司は苦笑いするしかなかった。

「……ん、此処は？」

ぬえは風が当たっていることに気がつき、目を覚ました。見ると、映司の肩に手を回す形でバイクに乗っていた。

「え？え？」

「ぬえちゃん、いつの間にか寝てたみたいだからその間に帰ろうとしてたんだ」

事態が飲み込めず混乱しているぬえに映司がいきさつを話す。ぬえは理解すると、ホッと安堵した。

「そつえばお前」

ぬえの後ろに座っているアंकが話し掛ける。

「クワガタのメダル持ってた奴が言ってたぞ」

『貴女の言う通り、私には扱えそうにないや。ちゃんとメダル全部集めてね。最後まで頑張つて!』

「……だとさ」

アंकがそう伝えると、ぬえはポーツと空を見上げた。

「どうしたの?」

「いや……破れない約束、出来ちゃったなあって」

ぬえは映司にしがみつく力を強め、ギュッと抱きしめた。

集まったメダルは、

タカ 二枚

クジャク

ライオン

トラ

チーター

クワガタ

カマキリ

バツタ

ゴリラ

三人のメダル回収は続く。

第3話Aパート - 疑惑と河童と危険なダークサイド（前書き）

今更ながら。

アंकがナズーリンと鉢合わせした時のがチーター。

星から貰ったのがライオンのコアメダルです。

本当に今更ですね。

第3話Aパート - 疑惑と河童と危険なダークサイド

前回の東方核争奪、三つの出来事！

一つ、ぬえがもう一人のオーズとして変身！

二つ、リグルがぬえにメダルを託す！

三つ、暴走するレミアを二人のオーズが倒した！

c o u n t t h e m e d a l s

現在、オーズの使えるメダルは、

タカ 二枚

クジャク

ライオン

トラ

チーター

クワガタ

カマキリ

バッタ

ゴリラ

「また君は勝手にアイスを食べて！」

紅魔館での争奪戦の翌日、アंकはまた命蓮寺のアイスを盗み食いしていた。

ナズーリンがアंकを咎めるが、アंकは気にも止めない。

「アイスの一本や二本で煩い奴だな・・・ん？」

アंकの服の袖をぬえが引っ張っていた。

「あの・・・映司って、アイス好き？」

「・・・ぬえー？」

ナズーリンがぬえの耳打ちを聞いて、ぬえに詰め寄る。

ぬえは慌てて弁解する。

「ち、違うわよ！別に、え、映司にプレゼントしたいとか、そんなんじゃない・・・」

真っ赤になったぬえの頬を見て、ナズーリンは疑いを強める。

「ふーん？」

「あ……う」

ぬえは気恥ずかしさに耐え切れずに目を逸らす。

「……まあいいや、とにかくアイスを食べるのはこれっきりにしてくれよ」

アंकはナズーリンの忠告を聞かずにその場から去っていく。
ぬえも慌てて追い掛ける。

「じゃあナズーリン、行って来ます!」

アंकと一緒に去っていくぬえを見てナズーリンはため息をついた。

コアメダルを回収するため、今日も三人は探索をしていた。

アंकが示す方に映司はバイクで走っていく。
そのすぐ隣にぬえが飛行して着いていく。

アंकは指示を出す時以外は黙っていたが、ある時突然咳いた。

「しかし、妙だな」

「何が?」

映司が尋ねるとアंकが答える。

「昨日の吸血鬼はコアメダル一枚で湖の気温を上げた。なら、紫のメダルを取り込んだ奴は更に大規模の異変を起こしてるはずだ」

「まだ誰も拾ってないんじゃない？」

アंकはその発言を聞くと黙った。

「ねえ、紫のメダルって何？他と違うの？」

ぬえは話に付いて行けず、アंकに詳細を尋ねた。

アंकは面倒だが紫のメダルについて説明を始めた。

「メダルの力の源が欲望ってのは知ってるな。それに対して紫のメダルの性質は……無だ」

「……無？」

「ああ、あらゆる欲望を無にして消してしまう。その力は他と比較にならない程強力だ」

紫のメダルについての説明を終えると、アंकはだんまりを始めた。

「・・・見つからないな」

映司が呟くとぬえが頷いた。

メダルを探して数時間になるが一向に見つからない。
流石に疲れたのか、ぬえがアंकに愚痴を零す。

「ねえ、アंकって本当にコアメダルの位置分かってんの？」

「ああ、うっすらとな」

アंकのその回答に、映司は思わず物申す。

「ちょ、アंक。お前、前にハッキリ分かるみたいなこと言ってた
だろ？」

「そうだったか？」

アंकの態度に映司とぬえは呆れ果てる。

このまま闇雲に探しても仕方ないので、三人は川で一息付くことに
した。

「こんな綺麗な川があったんだ」

映司が感心すると、ぬえが川で顔を洗ってから話し始めた。

「探してる内に妖怪の山に来ちゃったみたいね」

「妖怪の山？」

「そう。河童とか天狗が住んでて、最近じゃ神社も出来た幻想郷でも変わった所よ」

アングは興味なさ気だったが、映司は「へえー」と熱心に聞いていた。

そして、川の上流の方を指差してた。

「ひょっとして、あれが河童？」

ぬえは映司が指差した先を見た。

そこには数人の河童が水遊びをしていた。

「そうそう、あれが河童・・・何だ、にとりも居るじゃない」

「・・・あ、新しいのが！」

映司は再び上流を指差した。

そこには、鋭いヒレが水面から飛び出し、素早く移動していた。

ぬえは首を傾げた。

「あれ、あんなのいたっけ？」

「・・・おい、ヤミーだ！」

アングの言葉に、映司とぬえは「えっ？」と顔を合わせる。

そして、バツと再び上流を見た。

その瞬間、川の中から怪物が飛び出した。

鮫の姿をしたヤミー、鮫ヤミーだ。

水中から飛び出した鮫ヤミーは、水爆弾を何個も発射した。地面に当たった瞬間に水が爆散し、河童達は吹っ飛ばされる。

その時、アंकが腕から炎を放ち、それが鮫ヤミーの周りを爆破する。

急な攻撃を受けた鮫ヤミーはびっくりして動きを止めた。

「アंक!?」

映司はアंकがいきなり攻撃したことに驚く。

「向こうの方から来てくれた方がいいだろ」

「何か、凄い怒ってるんだけど」

鮫ヤミーは映司達を睨みながら近寄って来る。

「アイツは熱に弱い。これで行け」

アंकは映司とぬえに三枚ずつメダルを投げる。

二人はそれを受け取るとドライバーにメダルを入れる。

オースキャナーでメダルをスキャンし、オーズに変身する。

「変身！！！」

ライオン！トラ！バッタ！

クワガタ！ゴリラ！チーター！

映司はラトラバ、ぬえはガタゴリーターに変身する。

「ハアッ！」

ラトラバはバッタの跳力で鮫ヤミーの元までジャンプし、殴り掛かる。

すると鮫ヤミーは地中に潜り、物凄いスピードで移動する。

ガタゴリーターは鮫ヤミーを追い抜き、ゴリバゴーンで殴り付ける。

しかし、殴られる寸前で鮫ヤミーは地中から飛び出し、ガタゴリーターに体当たりをする。

ガタゴリーターは転倒するが、ゴリバゴーンを発射して鮫ヤミーを吹っ飛ばす。

その時、新たに四匹の鮫ヤミーが現れた。

鮫ヤミーは水爆弾を投げ付け、二人のオーズは水に逆らえず吹っ飛ばされる。

ガタゴリーターは頭のクワガタヘッドから緑色の電撃を放ち、四匹

のヤミーを地中から弾き出す。

鮫ヤミーが出て来たのを見計らってラトラバは頭からまばゆいばかりの光を放つ。

強烈な光に鮫ヤミーは目を覆って悶える。

「アंक、タトバ！」

映司の要求通りにアंकはタカメダルを投げる。
ラトラバはそれを受け取り、ライオンのメダルと入れ換えて変身した。

タカ！トラ！バッタ！

タ・ト・バ、タトバ、タ・ト・バ！

スキヤニングチャージ！！！！

映司はラトラバからタトバコンボにコンボチェンジし、直ぐさまメダルをスキヤンした。

そして、足をバッタの様に變形すると、高く飛び上がる。
オーズと鮫ヤミー達の間には、赤、黄、緑のリング型のエネルギーが現れる。

「セイヤーッ！！！！」

オーズのキックはリングをくぐる度に強化される。
必殺のタトバキックは四匹の鯨ヤミーを仕留め、鯨ヤミー達はセル
メダルとなって散り散りになる。

タトバは残る一匹の鯨ヤミーに立ち向かう。オーズとヤミーの格闘
が始まった。

アंकはそれを見計らってガタゴリーターにクジャクメダルを投げ
る。

「それを真ん中に入れる！」

「えつと、真ん中真ん中……」

メダルを入れ換えると、メダルをスキャンする。

クワガタ！クジャク！チーター！

ぬえはガタゴリーターからガタジャーターにフォームチェンジする。

「スピナーのセルをコアに変えてスキャンだ！」

アंकの指示に従い三枚のコアメダルを左腕のタジャスピナーに装
填し、オースキャナーを回転するタジャスピナーにスライドしてス
キャンする。

クワガタ！クジャク！チーター！ギン！ギン！ギン！
ギガスキャン！！！！

スピナーに緑、赤、黄の三色のエネルギーが蓄積し、その回転するエネルギーを鮫ヤミーに発射する。

「セイヤーッ！！！！」

タトバはガタジャーターの攻撃に気付き、鮫ヤミーをガタジャーターのギガスキャンに向かって蹴り飛ばした。

ガタジャーターの攻撃に鮫ヤミーは直撃し、爆発して散っていった。

映司とぬえは変身を解き、ハイタッチをした。

「「イエイ！！」」

「浮かれてないでコアがないか探せ！」

アंकは二人にコアメダルを探させるが、どこにもコアメダルは無い。

仕方なくアंकはセルメダルだけ集めていく。

「コアメダルは無いみたいね」

「・・・あれ、じゃあ何でヤミーが出て来たんだろう?」

映司が不思議に思って呟くと、腰に巻いてあるドライバーを誰かがガチャガチャと弄っていることに気が付いた。

「ちょっとにとり、何してんの?」

ぬえはドライバーを弄る河童の少女に話し掛けた。
その子の名は河城にとり。

「いや、さっきの戦いが凄くてねー。ちょっと、調べさせてくれな
い?」

「ふざけんな!」

アंकはにとりに掴み掛かろうとしたので、ぬえは何とか押し止める。

結局、三人はにとりの家へ出向くことになった。

にとりはオーズドライバーを調べながら自分達河童について映司とアंकに説明した。

「じゃあ、河童は幻想郷で一番機械に詳しいんだ」

「はっ、考え物だな」

感心する映司に対してアंकは遠慮なく悪態をつく。すっかり見慣れた光景にぬえは思わずクスリと笑う。

その時、誰かが扉を開けてにとりの家に入ってきた。

緑の長い髪をリボンで結び、顔の下で一つに纏めた珍しい髪型の少女だった。

しかしその髪型は少女に違和感を与えず、綺麗な印象を与えた。

にとりはにっこり笑って少女に話し掛けた。

「いらっしやい、雛」

「こんにちは。．．．こちらの方達は？」

「ああ、彼らはね．．．」

少女、鍵山雛に、にとりは映司達の紹介をする。話を聞き、雛は映司とアंकに話し掛ける。

「初めまして、鍵山雛です」

「あ、俺は火野映司です。で、コイツは．．．」

と、映司がアंकの紹介をしようとした瞬間、アंकは雛の腕を掴み上げた。

「アंक、お前もしかしてナンパか!？」

「え、いきなり!？」

映司とぬえは囁し立てるが、アंकは「ふざけんな!」と一喝して再び雛を睨む。

「あの、一体何・・・」

「御託はいい。持つてるメダル出せ」

その言葉を聞いて、映司とぬえは囁し立てるのをやめ、アंकと雛を見た。

雛は暫く俯いていたが、やがて観念したのか左手を開いてメダルを見せた。

そのメダルを見て、三人の顔が驚愕で変わった。

プテラ、トリケラ、ティラノ

雛の手には、三枚の紫のメダルが握られていた。

第3話Bパート・合成と言葉と無敵のコンボ（前書き）

ぬえ式変身ポーズ

まず、右手にオースキャナーを持ち地面に対して垂直に向けます。
（最終回の最後の変身の時の感じ）

その向きが崩れないように軽く上に投げ左手でそれを掴みます。

後はそのままメダルをスキャン！！

オースキャナーの向きが逆になりますが、ちゃんとスキャン出来ま
す（玩具で実証済み）

最後に、映司はメダルスキャンの後に左手を胸に掲げますが、ぬえ
はそれを右手でします。
要するに映司とぬえは変身の時の手が左右対称なのです。

では、本編をどうぞ！

第3話Bパート・合成と言葉と無敵のコンボ

「紫のメダル!？」

「お前……」

映司とアंकは動揺を隠し切れず、雛の持っているメダルにただただ驚いた。

「何で、暴走してないの?コアメダルを三枚も持ってたら確実に耐え切れないはずよ」

「それに紫のメダルは更に危険なのに」

ぬえと映司は疑問を口にした。雛に聞くよりも自分に聞かせている様だった。

「お前、何者だ?どうしてこの世界でコアメダルを三枚もコントロール出来る?」

アंकは雛に詰め寄る。

雛は答えづらそうに俯いた。

「まあまあ皆落ち着いて。とにかく、冷静にもう一度話し合ってみようよ」

にとりが手をパンパンと叩きながらその場を仲裁した。

そして、映司達は雛のこと、紫のメダルを拾った経緯を聞いた。

「人の厄を集める・・・かあ。そんな人もいるんだ」

映司が呟くと、雛は頷いて答えた。

「ええ、人々の厄を集めて浄化するのが私の仕事でもありますし、存在する理由でもあります」

「なるほどな、通りで紫のメダルを扱える訳だ」

アングの発言に、その場の全員が「こいつは何を言っているんだ」と言いたげな顔をしたのでアングは仕方なく解説した。

「人の厄。それはただの不運もあるだろうが、それ以上に人の負の欲望も含まれているはずだ」

「そうね」

「紫のメダルはあらゆる欲望を消して無にしてしまう。こいつは自分が集めた厄を紫のメダルで消させることでメダルの影響を最小限に抑えてる」

アングが話し終わると、雛は再度頷いた。

映司とぬえは話がややこしくなったので二人で整理を始めた。

「えっと、つまり雛ちゃんは厄を集めて」

「紫のメダルで消して、その繰り返し……ねえ映司、何で雛ちゃんって呼んだの？」

「知り合いに同じ名前の呼び方の子がいるんだ」

ぬえは若干不機嫌になったが頭を切り替え、雛に話し掛けた。

「まあそういうことだから、そのコアメダルを譲って欲しいんだけど」

「……駄目」

ぬえはやっぱりか、と思った。

素直に譲ってくれるとは最初から期待してなかった。

「つべこべ言わずにとっとと寄越せ。お前が持っても仕方ないだろ」

アंकが右手をちらつかせて雛を脅しに掛かる。

映司は止めようと思ったが、紫のメダルを雛が所有していても困るため動けずにいた。

その時、雛はにとりの家から飛び出した。

呆気に取られたが、直ぐに事態を把握したアंकはすぐさま雛を追った。

映司とぬえもとりの手からドライバーを掴み取ると、アंकを追
い掛けた。

にとりはいきなりのことに対応出来ず、ポカーンとほっけていた。

外に出ると、空を飛んでいる雛の姿が見えた。

アंकは舌打ちすると、映司とぬえに命令する。

「追え！あいつ追うんだよ！！」

映司はライドベンダーに乗り、アंकもそれに飛び乗り雛を追う。
ぬえはそれに続く形で空を飛んでいく。

映司はバイクを運転しながら、アंकに尋ねた。

「アंक、雛ちゃんはどうしてコアメダルを渡してくれなかったん
だろう」

「・・・さあな」

いつもは即座に悪口の一つでも言うのに、今回は何も言わなかった。

何か心当たりがあるのかと聞こうとした瞬間、

「ウオオオオオオオオオオオオ!!」

何者かがバイクの側面にタックルし、映司とアंकは転がり落ちる。ぬえは二人の側に着地し、手を引いて助け起こす。

映司達はぶつかってきた何者かを見る。

そこにはエイとサイの力を併せ持ったヤミー、エイサイヤミーがいた。

「アंक、メダル!」

映司とぬえにメダルを渡そうとアंकはホルダーを開いた。

その瞬間、エイサイヤミーは雄叫びを挙げた。

「ウオオオオオオオオオオオオ!!」

エイサイヤミーの体が巨大化し、その体はまるで巨大なエイのようだった。

イトマキエイヤミーはアंकに突撃し、アंकはメダルをばらまいて吹っ飛ばされる。

「アंक!!」

映司はアंकの名を呼んだが、アंकは川に落ちて姿が見えなくなっってしまった。

イトマキエイヤミーは続けて映司に向かっていく。その時、ぬえが落ちたコアメダルを拾って映司に体当たりをして、イトマキエイヤミーを避ける。

「映司、これで！」

ぬえは三枚のコアメダルを映司に渡し、映司はそれを受け取る。

「・・・あれ、頭が二枚ある!？」

「あ、体が二枚だ」

映司とぬえは被ったメダルを交換し、今度こそ変身する。

「変身!!!」

タカ!ゴリラ!チーター!
クワガタ!トラ!バッタ!

映司はタカゴリーター、ぬえはガタトラバに変身する。

タカゴリーターはゴリバゴーンを発射し、ガタトラバはトラクローから衝撃波を飛ばす。

イトマキエイヤミーはそれをものともせず二人のオーズを突き飛ばす。吹っ飛ばされたオーズ達に再びイトマキエイヤミーが突っ込む。オーズはそれぞれジャンプとダッシュで回避した。

「くそっ！」

アंकは川から抜け出し、何とか地面に転がり込んだ。

アंकは自分の掴んだメダルを見た。

すぐに戻ることも出来たが、コアメダルが川に落ちたために全部拾うのに時間が掛かったのだ。

ライオン、クジャク、カマキリ。

その三枚がアंकの手元にあった。

「アイツの弱点を突けないばかりか、コンボも使えない・・・早く戻るか」

上流に向かって歩き始めた時、アंकは前方に何者かの気配を感じた。

アंकは咄嗟に身構えたが、正体を視認すると警戒を解いた。そこには雛がいた。

吹っ飛ばされて川を流れていた間に追い越していたようだ。

雛は逃げようとしたがアंकはその腕を掴んで雛を引き止めた。

「今すぐにも紫のメダルが必要だ。来い！」

「駄目！」

雛はアंकの手を振りほどこうとするが、アंकは離さない。

「これは私に必要なの！だから、だから……」

雛はアंकから目を逸らし、俯いた。

二人は暫く黙っていたが、ある時アंकが口を開いた。

「お前が何欲しいかなんて俺には関係ない。厄神だか何だか知らないが、人間と欲望は大して変わらないからな」

だがな、とアंकは続ける。

「それをメダルと関わらせるな。お前が長年やって来たことはこんなメダル三枚で変わるもんだったか？」

雛は紫のメダルをギュッと握り締めた。

「昔、使える馬鹿が言ってたんだがな……人の命より、メダ

ルを優先させるな」

雛はアングの目を見つめた。

その手から、メダルを握る力が抜けていく。

「あいつらそろそろヤバい。今は黙ってついて来い！」

アングは雛を連れて映司達の元へ向かった。

雛は戸惑いながらアングに付いていった。

「ハアッ！」

ガタトラバは頭から電撃を放った。

しかし、イトマキエイヤミーは腹にある大量の手を使って水爆弾を投げまくる。電撃は全て水爆弾に防がれ、イトマキエイヤミーに届かなかった。

イトマキエイヤミーの頭からビームが放たれ、ガタトラバは吹っ飛ばされる。

そして、イトマキエイヤミーはガタトラバに突進する。

「危ない！」

タカゴリーターはガタトラバの前に立ち、ゴリバゴーンで防御の体勢を取る。

イトマキエイヤミーの腹の手がタカゴリーターを掴む。
そして、空中に飛び上がる。

大量の手がタカゴリーターを好き放題に殴り続け、空中から地面へ投げ落とした。

「ああああああっ！！！」

映司の変身が解け、地面を転がって倒れ込む。
立ち上がるうとするも、腕に力が入らず倒れてしまう。

「くっ……」

イトマキエイヤミーは空を縦横無尽に飛び回り、再び映司に向かう。

「映司！！！」

ガタトラバが電撃を放ってイトマキエイヤミーを攻撃する。

イトマキエイヤミーは回転して電撃を弾き、水爆弾を投げ付けた。

ガタトラバは周囲ごと爆発し、再び吹っ飛ばされた。

体中を紫が支配し、周囲の川や湖が凍っていく。そして、その氷が砕けると、中にいる者の全容があらわになった。

心の強さを試すプテラ。

微かでも光に挑むトリケラ。

現実など擦じ伏せる為暴れ出すティラノ。

太古から続く力を以って、願いや夢を護る破壊者。あるいは守護者。全てを砕き無にする無敵のコンボ、仮面ライダーオーズプトティラコンボが現れた。

プトティラはイトマキエイヤミーに飛び付き、右手で殴り飛ばす。

殴られたイトマキエイヤミーは大木に叩き付けられる。

「ウウウ・・・！」

プトティラは獲物を威嚇する獣の様なうめき声を挙げ、手を地面の中に突っ込んだ。

引き抜くと、その手には紫色の斧が握られていた。

アックスモードとバズーカモードを使い分けられる強力な武器、メダガブリューだ。

エイサイヤミーは水爆弾を投げ付けるが、プトティラはメダガブリューをバズーカモードに切り替えて水爆弾を迎撃する。

放たれた砲弾は水爆弾を貫通し、イトマキエイヤミーに命中する。
イトマキエイヤミーはよろけながらも頭からビームを放ち反撃する。

「ガアアアッ！！」

メダガブリューをバズーカモードからアックスモードに戻し、一閃を振るう。

メダガブリューの斬撃はビームを弾き無に帰す。

プトティラはオースキャナーを掴み、メダルをスキャンする。

スキャンニングチャージ！！！！

プトティラの肩から角が伸び、イトマキエイヤミーを貫く。

プトティラの背に巨大なプテラの翼が生え、羽を振って強力な冷気を放つ。

イトマキエイヤミーは凍りつき、巨大な氷像と化す。

プトティラに巨大なティラノの尻尾が現れ、体を回転する。その途中で大地を踏み締めてストップし、逆に回転する。

体重と回転力、紫のエネルギーを帯びた尻尾が振り回され、凍り付けになったイトマキエイヤミーに叩き付けられる。

イトマキエイヤミーは碎け散り、大量の氷の破片が辺りに舞い落ちた。
キラキラとした幻想的な輝きが静かにその場を包み込んだ。

碎け散ったイトマキエイヤミーの中から、二枚のコアメダルが飛び出して来た。

アंकはそれらを鷲掴みした。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!」

プトティラは雄叫びを挙げ、今にも暴れ回らんとする。

その時、雛が手を前に差し出した。ドライバーに収まっていたメダルが飛び出し、雛の手中に戻った。

映司の変身が解け、その場に倒れ込む。
ぬえは変身を解き映司を抱き起こす。

「はあ、はあ、はあ……っ!」

「大丈夫?」

「っ……大丈夫」

映司は辛そうにしていたが、ぬえに支えられて何とか立ち上がる。

雛はメダルを握り締めていたが、アंकが自分を見ていたことに気が付き、バツと後ずさる。

「・・・見たでしょう?」

「ああ、ただでさえヤバいのに更に強くなってるな」

「だから、貴方達にこのメダルは渡せない。私が・・・私に、」

アंकは雛に近付く。

雛の体が固まった。

「アंक!」

「アंक!」

映司はアंकが雛に危害を加えるのでは、と思いつめようとするが、ブテイラコンボの影響か体が動かない。

ぬえもアंकを制止しようとするが映司を支えているためその場から動けない。

アंकはもう雛の目前まで迫っていた。

雛は目をつぶり、体を震わせる。

しかし、アंकは雛を通り過ぎ、雛の後ろに立った。

「そのメダルはお前が持つてる」

アंकの言葉に三人は驚く。

雛は思わず振り返ってアंकを見る。

アंकは依然として背を向けている。

「わざわざ逃げ回ってまで欲しかったんだ。何か理由があるんだろ。例えば……厄を浄化仕切れなくなった、とかな」

雛は再び驚き、目を丸くした。

思わず手で口を抑える。

「……どうして、それを」

「勘だ。それ以外に理由が思い付かなかったし、わざわざお前自身の話していたからな」

紫のメダルをどう使っているか。

その話をしていた時に、アंकは既に怪しいと思っていた。

雛の紫のメダルの使い道は雛が普段自分一人でやっていることだ。

ならば紫のメダルなど必要でないだろうし、もし必要だとしたらそれは雛の仕事に支障が出たということ。

「だったらお前が持つて紫のメダルを大人しくさせとけ。厄を暴発なんてされても困るからな」

アंकがそう言うと、雛は小さく頷いた。
すると、アंकは雛の手を握り締めた。

「だが、いつ必要になるか分からん。これからはずっと俺の傍にいてもらうぞ」

「え？・・・え？」

アंकの発言に雛は一瞬啞然としたが、すぐに顔を赤くする。

「アंक、お前それプロポーズか!？」

「電撃結婚!何と!!出会って数十分!!!」

映司とぬえが噤し立てると、アंकは怒りに身を任せて二人に襲い掛かる。

「お前らぶざけんな!!」

映司とぬえはアंकから逃げ回り始めた。

雛は呆然としていたがアंकの言葉を思い返していた。

厄神という存在のため、今まで近くに寄って来ようとするものはおらず、また近くに寄せ付けないようにしてきた。

だから、情性や好奇心以外で雛の傍にいようとする者はいなかったために驚いていた。

「アंकク・・・ありがとう」

ぶっきらぼうしながら、自分の傍にいてくれる。
アंकクの言葉に、どれ程自分が救われたか。

雛は騒いでいる三人の元へ駆け出した。

集まったメダルは、

タカ
クジャク
ライオン
トラ
チーター
クワガタ
カマキリ
バッタ
サイ
ゴリラ
シャチ

プテラ
トリケラ
テイラノ

四人の旅は、まだまだ続く。

第3話Bパート・合成と言葉と無敵のコンボ（後書き）

いよいよ雛が登場。

今後はこの四人をメインに進めていきます。

第4話Aパート・人里と分担と鳥ヤミ

前回の東方核争奪、三つの出来事！

一つ、映司達のオーズドライバーをにとりが解析！

二つ、雛が紫のメダルを所有していた！

三つ、プトティラコンボに変身。雛が行動を共にすることになった！

count the medals

現在、オーズの使えるメダルは！

タカ

クジャク

ライオン

トラ

チーター

クワガタ

カマキリ

バッタ

サイ

ゴリラ

シヤチ

プテラ

トリケラ

ティラノ

「ハアッ！」

映司の変身したタトバコンボがメダジャリバーでクズヤミーを斬り裂いた。

クズヤミーは二階の屋根から転がり落ちる。

ぬえはサゴリーターになって地上のクズヤミーを殲滅していく。メダル集めの最中、一息つく為に訪れた人里にクズヤミーが現れた為、映司とぬえは撃退をしていた。

アंकと雛は少し離れた家屋の屋根の上で様子を見守っていた。

タトバは屋根の上で立ち回り、次々とクズヤミーを斬りつけていく。

サゴリーターは落ちたクズヤミーに高速で近付き、ゴリバゴーンで叩き潰す。

「お前らこれで決める！」

アंकは映司とぬえにメダルを投げ渡す。
二人はメダルを装填するとスキャンする。

シャチ！トラ！バツタ！
サイ！カマキリ！チーター！

映司はシャトラバ、ぬえはサキリーターになる。

シャトラバは頭から全方位に水を発射し、クズヤミー達はその場で動きを止められる。

スキャニングチャージ！！

サキリーターはサイヘッドを突き刺す形で突進し、クズヤミーは爆発する。

続けてカマキリソードで次々とクズヤミーを切り捨て、全てのクズヤミーが消滅した。

「「「「おおおー！！！！」「」「」

周りにいた人達の歓声が挙がる。

人里に現れた怪物を退治したオーズを讃えているのだろう。

アंकは面倒臭がりながら雛の手を引いてその場をこっそり去り、雛もアंकに付いていく。

二人のオーズは照れ臭そうに頭を掻き、騒ぎが大きくなる前にその場を跳び去った。

四人は戦場から離れた場所で落ち合い、人里での搜索を再開した。

そもそも今日は人里にコアメダルがあるとアंकが察知したから、それを探すために来ていたのだ。

その最中にクズヤミーが現れ、仕方なく対処していた。

「まったく、面倒なことになる前にさっさとメダル集めるぞ」

アंकがイライラしながら命令する。

コアメダルの存在が認知されれば、その力を狙う奴が現れる。

そうなる前に手早く回収しようとアंकは考えた。

映司達もその意見には賛成だった。

「ねえ、人里のどこにあるか分からないの？」

ぬえはアंकにコアメダルの行方を尋ねた。

人里にあるという事は分かったのだが、詳しい位置は分かっているかい。

「・・・既に、誰かが拾ってるかもな」

アंकは暫し考え、今日の方針を指示した。

「二手に別れてコアメダル持つてる奴見つけ出さず。映司と雛で組め」

アंकはコアメダルを何枚かホルダーから取り出し、雛に預けた。

「アंक、気をつけてね」

雛はメダルを仕舞い、映司と共に北の方角へ歩いていく。

「俺達も行くぞ」

アंकに従い、ぬえは映司達と別れてアंकに付いていく。

「それにしても、まさかこんな変な集団になるなんてね」

ぬえは思わず呟いた。

「ああ、これ以上ない位おかしな集まりだな」

人間、グリード、鶴に厄神。

確かに変な四人組が出来たものとアंकは半ば呆れて答えた。

「映司とアंकって、どうして一緒にいるの？」

「あいつが使える馬鹿だった。それだけだ」

「馬鹿と一緒に戦ってて楽しかったの？」

「いつも勝手な事ばかりやるからな。本当にイライラさせられた」

アंकは元の世界の事を思い出したのか、足早になる。
ぬえは速度を合わせた。

「じゃあ映司と組んで、良かったと思う?」

「・・・お前、どうした?何でそんなこと聞く」

アंकが尋ねると、ぬえはウーン、と悩んだ。
そして立ち止まって答える。

「ほら、思えば私映司とばかり話しててさ、普段はあんまりアंकとは話さなかったじゃない?だからさ、こっつ、違った視点から映司を知りたいというか」

「ただの色ボケか」

アंकが切り捨てるとぬえは顔を真っ赤にして文句を言う。

「何よ、そういうアンは雑とはどうなってるのよ」

「はあ?」

ぬえはここぞとばかりに畳み掛ける。

「アంత達、二人だけ態度がゆったりしてるもの!だから、ええと、つまり・・・」

「お前は何話すか決めてからその馬鹿みたいな口を動かせ」

アंकクに言いくるめられるのが気に入らないため、ぬえは率直に尋ねた。

「アंकク、雛のこと好きでしょ」

「・・・お前、頭が花でいっぱいだな」

アंकクは呆れて雛を無視して足を進める。

ぬえは尚も食いつく。

「いや絶対好きだつて。アंकクが雛のこと好きじゃなくても雛はアंकクのこと好きだつて」

「お前は黙ってメダル探せ」

アंकクは諦めてぬえを放置してコアメダルを探しに行った。

ぬえはまだ問い詰め足りないのか質問を頭の中で考え始めた。

「良く考えたら、俺達だけでどうやってコアメダル探せばいいんだろっ？」

「・・・そういえば、そうね」

雛は映司の発言に頷いた。

アंकならばコアメダルが近くにあれば分かるが、自分達ではどうしようもない。

映司が悩んでいると、雛が腕からプテラのメダルを取り出した。

「とりあえず、このメダルと似た反応がないか調べるわ」

「そんなこと出来るの?」

「多分、出来ると思う。特殊ではあるけど、同じコアメダルなもの」

雛はコアメダルを翳しながら歩いて行く。

映司は雛に話し掛けた。

「ごめんね雛ちゃん。アंकや俺に付き合わせて」

「いいのよ。私、厄を浄化してると言ってもいつもぶらぶらしてるだけだから」

雛は映司が気負わない様に笑顔で答えた。

映司はそういえば、と思い出した様に尋ねた。

「ぬえちゃんにも無理に付き合わせてるかも。迷惑してないかな・・・」

「大丈夫よ。私もぬえも、きっと好きでやってるから」

「そうなの？」

「ええ、好きでね」

それとなく含みを持たせた言い方で雛は答えた。

映司はあまり分かっていなかったが、そっか、と納得した様子だった。

「・・・あ、ちょっとだけ反応が」

雛は紫のメダルを反応した方向へ翳した。

その先には家屋の屋根に立つ青オウムヤミーがいた。

「・・・え？」

二人は一瞬硬直したが、青オウムヤミーが火球を吐いてきたことに気づくと、跳んで回避した。

その頃、アंकとぬえの前にもヤミーが現れた。

その姿は、青オウムヤミーに類似した姿だった。

ただ青オウムヤミーと違い、全身は赤で印象を持たせた。

「鳥のヤミー・・・俺のメダルがあんのか」

アंकはぬえにメダルを投げ渡した。

「ぬえ、絶対にあいつ潰せ」

「はいはい・・・言われなくても」

ぬえは三枚のメダルを受けとった。

「映司君、これを！」

「ありがとう！」

映司は雛が投げたメダルを受け取る。

映司とぬえ。二人はメダルをドライバーに装填し、メダルをスキヤンした。

「変身！！！！」

シャチ！トラ！チーター！

サイ！カマキリ！バッタ！

映司はシャトラーター、ぬえはサキリバに変身した。

シャトラーターはシャチヘッドから水を発射し、青オウムヤミーを屋根から弾き落とした。

チーターの駿足で青オウムヤミーに素早く駆け寄り、接近戦を仕掛ける。

青オウムヤミーはシャトラーターの腕を叩き、カウンターで裏拳を叩き込む。

シャトラーターはトラクロウを展開し、青オウムヤミーを引っ掻いた。

休ませないように、シャトラーターは畳み掛ける。

サキリバは赤オウムヤミーの放つ火球をカマキリソードで切り裂く。

そしてジャンプで赤オウムヤミーの視界から逃れると、背後から頭突きをお見舞いする。

赤オウムヤミーは翼を広げ、逃走を計る。

「あ、どうすれば・・・」

「こいつでさっさと仕留める」

アंकは一枚のメダルをぬえに投げた。

シャトラーターの拳が青オウムヤミーの腹に直撃し、その体を吹っ飛ばす。

青オウムヤミーはそのまま低空飛行で逃げようとする。

「ああ、どっしょっ?」

「これに変えて!」

雛は一枚のメダルを映司に投げ渡す。

「そうか、これなら!」

「そうか、これなら!」

映司とぬえは頭のメダルを受け取ったメダルに変えてスキャンする。

ライオン!トラ!チーター!

クワガタ!カマキリ!バッタ!

ラタラタッ、ラトラーター!

ガータガタガタキリッバ、ガタキリバ!

映司はラトラーター。
ぬえはガタキリバへとコンボチェンジする。

ラトラーターは高速で走り出し、あっという間に青オウムヤミーに追いつく。

ラトラーターは腹に蹴りを繰り出し、青オウムヤミーはバランスを崩して転倒する。

赤オウムヤミーは出来るだけ空高くへと逃げようと羽ばたく。

ガタキリバは50人に分身し、ジャンプで分身の肩に乗り、タワーを作る。

五本のタワーの頂点にいるガタキリバは頭から電撃を放ち、赤オウムヤミーを撃ち落とす。

撃ち落とされた赤オウムヤミーは直ぐに立ち上がった。

すると、すぐ近くに屋台と、仕入れをしている男がいるのに気が付いた。

赤オウムヤミーは何故か男に襲い掛かり、仕入れの商品が床に落ちる。

「ひ、ヒューー！」

男は悲鳴を挙げて助けを求める。

その時、側の家の壁が崩れて青オウムヤミーが吹っ飛んで来た。

青オウムヤミーは赤オウムヤミーを突き飛ばし、男は解放された。

青オウムヤミーが空けた穴からラトラーターが出て来た。

先程青オウムヤミーが飛び出して来たのはラトラーターがヤミーを投げ飛ばしたからだだった。

ラトラーターは男が倒れているのに気が付くと、男を助け起こした。

「大丈夫ですか!？」

「あ、ああ」

男には目立った外傷はなく、無事だと確認出来る。

「おのれ、オーズ!」

「フオウ!!!」

二体のオウムヤミーはラトラーターに敵意を向ける。

ラトラーターは襲い来るヤミーの攻撃を受け流し、格闘戦を始める。

ラトラーターの拳が青オウムヤミーに食い込み、背後から襲い掛か

る赤オウムヤミーには、展開したトラクローで引っ搔く。

雛は現場に追い付き、物陰から様子を見守る。

すると、向こう側からアंकとガタキリバが来ているのに気が付いた。

ラトラーターは二体のオウムヤミーを蹴り飛ばし、オウムヤミー達はラトラーターとガタキリバの間に倒れた。

スキャニングチャージ!!!

スキャニングチャージ!!!

ラトラーターは黄金の三つの輪を潜って加速し、ガタキリバは竜巻のように回転し、クワガタヘッドをぶつけるように突進する。

「セイヤーツ!!!!」

ラトラーターはトラクローでX字に敵を引き裂き、ガタキリバは突進でヤミーを突き刺す。

二体のオウムヤミーは爆散し、セルメダルが辺りに散乱した。

映司とぬえは変身を解き、アंकはセルメダルを回収する。

雛も仕方なくセルメダルを集め始めた。

すると、襲われていた男が一行に話し掛けた。

「アンタ達、ありがとうな。助けてくれて」

「いえ、そんな気になさらずに」

雛が答えると、男はへこへこと頭を下げる。

「お礼と言っちゃなんだが、何か食ってってくれよ！今日の分は駄目になっちまったけど、アンタ達の方だけだったら何とかなるさ！」

一行は男に誘われるまま、屋台に座った。
男は注文を聞く。

「何が食べたいんだい？」

「……水、を」

「同じく……」

映司とぬえは屋台に突っ伏してぐったりとうなだれていた。

コンボの負担が効いているようだ。

「私はお茶を」

「アイス寄越せ」

雞はお茶、アंकはアイスを要求した。

「何だ、作りがいがねえな・・・分かった、俺の奢りで何か適当に作ってやるよ！」

男は張り切って焼鳥を焼き始め、おでんをコトコト煮込み始める。

「そういえばこの店、最近新聞にも載った流行りの屋台ね？」

雞はこの店の事を思い出した。
味と人柄が好評だと見た記憶がある。

「そうそう、最近妖怪のお客さんも増えてきてね・・・それで」

雞と店主の世間話をアंकは聞き流し、映司とぬえの様子を見る。

二人は未だにぐったりと延びていた。
当分起き上がりそうにない。

二人が回復するまで、屋台で休むことにした。

第4話Aパート・人里と分担と鳥ヤミ（後書き）

今回のガタキリバの必殺技ですが、元ネタはクラヒーの通常必殺技です。

あれ好きなんです。

第4話Bパート・聖と命と秘密の理由

屋台を後にし、一行は命蓮寺に帰宅することにした。

門を潜って敷地に足を踏み入れると、星が急いでこちらにやって来た。

「星、どうしたの？」

「待ってましたよ、ぬえ！」

ぬえが何があったのか聞こうとすると、星がぬえの肩を掴んで嬉しそうに揺さ振る。

「帰って来たんです、聖が！」

「白蓮！」

ぬえは戸を開けると同時に中にいる女性に駆け寄った。

「ねえ、あの人誰？」

映司は雛に小声で尋ねた。

「命蓮寺の・・・えっと、偉い人。そう、ここの皆はこの人を慕っ

て集まったらしいの」

仕事でここ数日は留守にしてたらしいけどね、と雛は話した。

映司は理解したがアंकはまた興味なさ気だった。

「ぬえ、彼らの事は星から伺ってますよ」

白蓮は映司達を見る。

「あ、俺は火野映司です。コイツはアंक」

「鍵山雛です」

二人が挨拶すると、白蓮も自己紹介する。

「私は聖白蓮です。貴方達のことば聞いてますが・・・ぬえ」

「うん・・・」

ぬえはこれから何を言われるか分かっているのか、珍しく大人しかった。

「如何なる時も殺生をしてはなりませんと言ったでしょう。聞けばヤミーという妖怪を退治して回っているようですね」

「・・・」

ぬえはやっぱりか、と思った。

聖の性格も信念も知っていたため、こう言ってくるとは思っていた。

「あのね聖。私は映司達とコアメダルを集めるって決めたの。そのためにはヤミーを倒さないといけないの」

「話し合いをすれば解決できるかもしれませんが。貴女は話し合いをしたのですか？」

「いや、その・・・してないけど」

ぬえは三人に助言してくれる様、目で訴えた。

雖はいたたまれなくなつて聖に進言した。

「コアメダルを取り込んだら他人の言うことを聞きません。皆、自分の欲に飲み込まれてしまえます」

「ヤミーも妖怪と変わりません。その命を簡単に奪っていいのですか？」

「いや、でもヤミーは」

「勝手な事ぬかすな」

映司が弁解しようとする、アंकが割って入った。

アंकがこんな会話に参加するとは思っていなかったため、三人は驚いた顔でアंकを見る。

「ヤミーもグリードも生きていない。ただのモノだ・・・妖怪だの何だの勝手なことばかり言うな」

「ですが、私にはそうは見えません。ヤミーも生きていますと私は思いますが」

アंकは白蓮を睨みつけ、白蓮も全く気圧されず、対峙する。

映司は見ていられず二人の間に割って入る。

「アंक、そんなムキになるなよ。それから白蓮さんも・・・貴女の信念は分かりますけど、俺達もそれは譲れないんです」

「私に反対すると言うなら、命蓮寺には置いておけません」

「そんな!」

白蓮が映司達に告げると、ぬえは白蓮に抗議した。
すると白蓮はぬえに目を向けた。

「貴女はとうですか、ぬえ。貴女は皆と一緒にいたいだけではないのですか?」

白蓮にそう言われ、ぬえは俯いて黙り込んだ。
だが、ぬえは顔を上げて白蓮の目を真っ直ぐ見つめた。

「私はヤミーを作ったことがあるから、その恐ろしさは知ってる・
・だから、私はコアメダルを全部回収する。それが私の欲望で、リ
グルとの約束！」

白蓮は雛にも目を向けた。

雛は白蓮を見ずにすぐに答えた。

「私は紫のメダルを使わないといけません。そして、アंकが帰る
その時までそばにいるって決めましたから」

「さっき別行動してたけどな」

「お前が行かせたんだろ」

アंकが空気を読まずに突っ込んだので映司は呆れてうなだれた。

白蓮は四人を見渡すと、凛々しい表情を一変させてクスツと微笑ん
だ。

「貴方達は本当に仲が宜しいんですね。聞いていた通りです」

白蓮の態度が急に変わったので四人は呆気に取られた。

「貴方達の意志が聞きたかっただけです。私の主張を曲げるつもり
はありませんが、命蓮寺に好きなだけ住んで頂いて結構です」

「・・・何だ、そうだったの」

ぬえは真相を聞いて安堵した。

白蓮は最初から追い出す気は無かったのだ。説教はする気だったよ
うだが。

「良かったわね、アंक」

「最初から従う気は更々なかったがな」

そう言ったアंकの顔が、どこか嬉しそうだったのは自分の勘違い
だろうか。

雛はクスツと笑った。

一方、人里では映司達が助けた屋台に多くの客がいた。

そこにはリグル、ルーミア、チルノ、レティの四人の妖怪がいた。

「へい、お待ち」

店主は四人に団子を差し出した。

四人はそれぞれ自分の団子を頬張る。

「うーん、美味しい」

「うまいのかー」

リグルとルーミアは美味しそうに次々と団子を食べていく。

「何だよ……」

どこからか低く重たい声が聞こえた。

店主達が辺りを見渡すと、夜雀の妖怪のミスティア・ローレライがいた。

「みすちー、どうしたの？」

チルノが尋ねると、ミスティアはワナワナ震え始めた。

拳を更に強く握り締める。

「どうして私の屋台には来ないで、ここには来るの……」

「あのね、ミスティア。それは……」

レティは困った顔で何を言おうか迷っているようだった。

ミスティアは激怒した。

「どうして私の屋台に来てくれないの！？私の所に来てよ……！」

ミスティアが叫ぶとその体がセルメダルに包まれ、ミスティアは軍鶏ヤミーとなってしまった。

店主とリグルは後退りした。

「ヤミーだ」

命蓮寺の面々が全員集まって雑談している所、アंकが呟いた。

それを聞いて、映司達三人は立ち上がってアंकに駆け寄る。

「いきなりでかい反応がした・・・長いこと寄生してたのが爆発的に現れたんだろっな」

「ってことは・・・？」

映司はある可能性を思い付く。

「コアメダルを持つてるかも！」

ぬえが映司の考えていたことを言うと、映司とアंकは頷いた。

「なら、急いだ方がいいわね」

雛がそう言うと、四人は部屋を出る準備をする。

「行かれるんですか？」

フードを被った少女、一輪が四人を案じる。

ぬえは一輪に答えた。

「うん、急がないと被害が広がるし」

「あー」

白蓮が手を挙げて何か言おうとしていた。

一同は何だろうと白蓮に注目する。

「やっぱり、どうしてもヤミーを倒さないといけないんですか？」

今更な発言にアंक以外の全員がズッコケた。

アंकはイライラしながら吐き捨てた。

「一人で言ってる！」

アंकはさっさと出て行ってしまった。

「彼は言葉遣いを先にどうにかしないとイケませんね」

「俺もそうは思ってますけどね」

映司がアंकの悪口を語りだす前にぬえは映司を引っ張り出す。
雖もその後を追う。

「ミスティア、落ち着いて！」

リグルは必死にミスティアに呼び掛けるが、軍鶏ヤミーは聞く耳を持たない。

そして、軍鶏ヤミーは羽をリボンに変えて発射した。リボンは店主達を拘束する。

軍鶏ヤミーは屋台に駆け寄り、打撃で屋台を破壊していく。

「やめてー！」

レティとリグルの声にも、軍鶏ヤミーは反応しない。

そして、とどめのキックが屋台を全壊させた。

その時、一台のバイクが軍鶏ヤミーを轢き飛ばした。

映司はヘルメットを脱いでライドベンドーから降りる。

ぬえが映司の隣に降り立ち、アंकを抱えた雛もその後ろに降り立つ。

アंकはホルダーを開けてメダルを選ぶ。

「あ、疲れてるからコンボは無しね」

「俺もね」

ぬえと映司はアंकに釘を刺す。

アंकは呆れてため息をつく。

「いざって時の為に少しは慣れとけ」

えー、と二人は嫌そうな反応を見せる。

アंकは六枚のメダルを二人に三枚ずつ投げ渡す。

「これでいけ」

アंकが投げたメダルをオーズドライバーに装填し、メダルをスキヤンして変身する。

「変身！！！！」

タカ！ゴリラ！バッタ！

シャチ！クジャク！チーター！

映司はタカゴリバ、ぬえはシャジャーターに変身する。

「ハアッ！」

タカゴリバはジャンプ、シャジャーターはダッシュで一気に軍鶏ヤミーに接近する。

「フオオオオ！！」

軍鶏ヤミーはムエタイの動きで対応。

二人の攻撃をいなしていく。

「ダアッ！」

しかしタカゴリバのパンチは防ぎ切れず、軍鶏ヤミーは転げ回る。シャジャーターはダツシユで近付き、ジャンプして頭から水を噴き出す。

軍鶏ヤミーは水流に飲まれ苦しむ。

シャジャーターは地面に着地し、しゃがんだシャジャーターの頭上をタカゴリバのロケットパンチが通り過ぎる。

水流に動きを止められていた軍鶏ヤミーはロケットパンチをモロに喰らって吹き飛ばす。

「ぬえ！その中にみすちーがいるの！」

リグルが呼び掛けると、シャジャーターは驚いた。

「そつだ、ヤミーと一緒に倒したら駄目なんだ」

シャジャーターがどうしようか悩んでいると、アंकが指示した。

「お前のチーターならセルメダルを削り出せる」

「だからぬえちゃんはいつを蹴って。俺がその隙に引っ張り出すから！」

タカゴリバはそう言って力強くゴリバゴーンを見せ付けた。

「分かった！」

軍鶏ヤミーはりボンを目茶苦茶に発射し始めた。

タカゴリバはりボンに腕を縛られるが、シャジャーターはりボンをかわしながら軍鶏ヤミーに近付いていく。

「こんなもの！」

タカゴリバはりボンをゴリラのパワーで引き裂いた。

やがてシャジャーターは軍鶏ヤミーに辿り着き、連続蹴りを浴びせる。

するとセルメダルが零れて中にいるミスティアが見えたが、軍鶏ヤミーはシャジャーターを蹴り飛ばす。

タカゴリバはジャンプで軍鶏ヤミーの元まで跳び、中のミスティアを掴んで引き抜いた。

「皆、お願い！」

タカゴリバはチルノやリグル達にミスティアを投げ渡す。リグル達は何とかミスティアを受け止める。

「ハアッ！」

シャジャーターは水を発射し、軍鶏ヤミーを吹き飛ばす。

「お前ら、とつとと決めろ！」

アंकが命令すると、オーズ達は必殺技を放とうとする。

スキヤニングチャージ!!!

タカゴリバは両腕のゴリバゴーンに力を溜め、シャジャーターはタジャスピナーにメダルを装填する。

「セイヤーッ!!!」

バツタ足の力で今までと桁違いの力で飛び掛かり、両腕のアップパーで軍鶏ヤミーを殴り浮かす。

シャチ！クジャク！チーター！ギン！ギン！ギン！ギガスキャン！
!!!

「セイヤーッ!!!」

タジャスピナーに青、赤、黄の三色のエネルギーが集中し、シャジャーターはそれを宙に浮かんだ無防備な軍鶏ヤミーに発射した。

三色のエネルギー弾は高速で進み、直撃した軍鶏ヤミーは爆発してセルメダルとなって辺りに散らばった。

アंकと雛はメダルを回収しに向かった。

暫くすると、ミスティアは目を覚ました。

最初は何があったか覚えておらず、困惑していたが段々思い出して来た。

「ごめんなさい！」

ミスティアは起き上がって店主に頭を下げる。

店主はミスティアの頭をポンポン叩き、語りかけた。

「なあ妖怪さん。どうして皆、あんたの屋台に行かなかったと思う？」

「え？」

ミスティアは顔を上げて、リグル達を見た。

レティはミスティアに話し出した。

「貴女にはいつも屋台で良くしてもらってるから、その・・・お礼に何をしたらいいのか話し合ってたのよ」

「でもチルノとルーミアがいつも食べるのに夢中になるから、ちょっと長引いちゃって・・・」

リグルは申し訳なさ気に笑って、頭をポリポリ掻いた。

「み、皆……」

それを聞いたミスティアの目から涙がこぼれ落ちた。

店主はその背中を優しくさすり、チルノ達は涙を拭いてあげた。

リグルはぬえに近付いて、礼を言った。

「ありがとう、おかげで助かったよ」

「気にしないで。私は、約束通りコアメダルを集めてるだけだから」

ぬえはそう言って微笑んだ。

リグルは頭を下げるとミスティア達の所へ戻った。

「一件落着、かな？」

「ええ、やっと一段落かー」

映司とぬえは緊張が解けてグッと背伸びした。

「雛、いつまでメダル集めてるのー？」

「だってアंकがやめないんだもの……アंक？」

雛はアंकに駆け寄ってアंकの手を覗き込んだ。

その手には赤いコアメダルが握られていた。

そして、アंकは突然立ち上がると思いつ切り叫んだ。

「俺のコアだー！！！！！！！！！！」

「うわっ」

ぬえはアंकが急に叫んだので驚いた。

映司はぬえの肩に手を置いて宥めると雛に話し掛けた。

「ゴメン、それアंकのコアだから三枚揃って嬉しいんだと思う」

「……………ふーん」

雛はアंकの隣にそっと忍び寄り、コンドルのコアメダルを掠め取った。

「どれどれ、どんなメダルかなー？」

「お前、コラッ返せ！オイ！雛！！！！！！」

「ウフフー、こっちよー」

アंकはキャツキャツウフフと逃げ回る雛を追い掛ける。

ぬえはそんな二人に呆れた。

「どっちが色ボケしてんだか」

「?何の話?」

「いや、こつちの話」

映司は良く分からなかったが、まあいいかと思った。

「じゃあ帰ろうか」

「うん」

ぬえは映司と手を繋ぎ、ライドベンダーまで歩き出した。

アंकと雛はまだ追いかけてっことをしていた。

集まったメダルは

タカ 二枚

クジャク

コンドル

クワガタ

カマキリ

バッタ

ライオン

トラ
チーター
サイ
ゴリラ
シャチ
プテラ
トリケラ
ティラノ

四人の旅は続く。

第4話Bパート・聖と命と秘密の理由（後書き）

今回登場したタカゴリバとシャジャーター。

この二つの亜種が好きだという方は多いんじゃないでしょうか。

皆さんの好きな亜種が出るといいですね。

第5話Aパート・エサとグリードと争奪戦

前回の東方核争奪、三つの出来事！

一つ、聖白蓮が命蓮寺に帰って来た！

二つ、ヤミーの主は寂しさを恐れるミスティアだった！

三つ、アングのコアメダルが三枚揃い、残りのメダルは三枚となった！

count the medals

現在、オーズの使えるメダルは！

タカ

クジャク

コンドル

クワガタ

カマキリ

バッタ

ライオン

トラ

チーター

サイ

ゴリラ

シャチ

プテラ
トリケラ
テイラノ

「あと少してコアメダルの回収も終わりかー」

ぬえが呟くと、アंकが答えた。

「ああ、残りのメダルは三枚だ」

「もう幻想郷ともお別れだね」

「皆さん、ご飯の時ぐらいコアメダルの話は控えましょう」

白蓮がアंक達に注意した。

ミステリアの事件を解決して翌日、映司達は命蓮寺で朝食をを食べていた。

命蓮寺の一同が揃って一つの部屋で食事をするのはもはや通例だった。

「しかし、もうお別れとは寂しいね」

「聖、そう熱くならずに」

「雲山、醤油取って下さい」

「これか？」

「私はキャプテンだよ」

「アंक、ちゃんとお碗を左手に持って！」

「アंक、俺の野菜取るなよ！」

「取ったのは雛だよ！」

「あ、ばれた？」

「・・・お前等、少しは間を開けて喋れ」

皆が一斉に話し始めたので誰が何を言ったのか分からなくなってしまった。

アंकは呆れて食事に専念した。

左手にお碗を持って。

朝食を終え、命蓮寺の面子はそれぞれ自分の持ち場に向かった。

アंकは屋根の上でヤミーかコアメダルの反応を探り、雛はアंकの付き添いをする。

映司とぬえは特にすることもないので縁側で暇を潰していた。

「映司」

「ん？」

ぬえは映司に話し掛けた。

「・・・コアメダルを全部集めたら、映司は元の世界に帰るんだよね？」

「うん、元の世界が心配だから」

ぬえはそれを聞いて顔を曇らせた。
いつかは別れなければならぬのは分かっていたが、それはもっと先の出来事だと思っていた。

このままお別れでいいのだろうか。

何も言わずに別れて、後悔しないだろうか。

「ぬえちゃん？」

映司に呼ばれ、ぬえは正気に戻る。

映司は心配そうにぬえの顔色を伺う。

「あ、大丈夫大丈夫！何ともないから」

ぬえは慌てて平常を装う。

映司はぬえが何か隠していると思ったが、それが何かは分からないでいた。

「・・・短いはずだったけど、何だかとても長く感じたわ」

雛は独りでに呟いた。

恐らくアंकに向けて言っているのだろうが、アंकは雛を見ない。

雛は構わずに続ける。

「貴方と出会って色々なことが劇的に変わったけど、それももうおしまいね」

「・・・だといいがな」

アंकが突然返事をした。

雛はアंकに尋ねた。

「何か不安があるの？」

「別に」

アंकは相変わらず雛に顔を向けない。

雖はアंकの隣に移動すると座り込んでアंकの顔を覗き込む。

「・・・アंक」

「何だ」

二人の間に沈黙が生まれた。

二人とも話をしようとしなない。

気まずいような、穏やかなような、暖かいような、そんな空間に二人はいた。

「・・・ヤミーだ」

突然アंकが咳き、立ち上がった。

そして映司とぬえの傍に飛び降りてヤミーの気配がしたことを伝える。

四人はすぐに出発した。

一行は魔法の森に来ていた。

じめじめした空気が肌に触れ、何とも言えない気持ち悪さを感じさ

せる。

ぬえはアंकに尋ねた。

「ねえ、ヤミーがどこにいるか分かんないの？」

「……………」

アंकは何も答えなかった。ヤミーの行方を探しているのだろう。

「…………何だ、この気配？」

一体何の気配がするのか映司はアंकに聞こうとしたが、突然四人の近くの木がバチバチと火花を挙げた。

辺りを見渡すと、クラゲの姿をしたヤミーが現れた。

「ヤミーってこいつか!？」

「アंक、メダルを！」

ぬえがメダルを要求すると、アंकは二人にメダルを投げ渡した。

「映司が奴の動きを止めて、ぬえがとどめを刺せ！」

二人はメダルを受け取り、変身する。

「「変身!!!」」

クワガタ！ゴリラ！バツタ！
ライオン！クジャク！チーター！

映司はガタゴリバ、ぬえはラジャーターに変身する。

ガタゴリバはクラゲヤミーの振るう電気の触手を頭から放つ電撃で弾く。

そして、ゴリバゴーンをロケットパンチで放ち、クラゲヤミーを吹き飛ばした。

スキヤニングチャージ！！！！

「セイヤーツ！！！！」

ラジャーターはチーターの高速ダッシュでクラゲヤミーに接近し、ライオンの熱をタジャスピナーに込める。
回転しながら炎を生み出すスピナーに熱が加わり、チーターのスピードが加わった一撃がクラゲヤミーを打ち倒した。

「……………何か、思いの外あっさりだったわね」

「アंक、コアメダルは？」

ラジャーターは拍子抜けして肩を竦め、ガタゴリバはアंकにコアメダルの有無を尋ねた。

「ああ、コアメダルはな・・・」

アंकが言いかけた所で何者かが二人のオーズを引っ掻いた。

オーズ達は火花を挙げて吹っ飛ぶ。

「久しぶり、アंक」

オーズを攻撃した者がアंकに話し掛けた。

アंकの表情はそいつを見て一変した。

「カザリ・・・」

アंकは憎々しげにカザリを睨みつけた。

「アंक、こいつは・・・？」

「カザリ、俺と同じグリードだ」

雛はアंकにカザリの正体を尋ねた。

アंकはカザリから目を離さずに答えた。

カザリはオーズに襲い掛かる。

ラジャーターはカザリから距離を取り、ガタゴリバはカザリの攻撃を受け止めた。

二人の攻防が展開するが、ガタゴリバは若干スピード不足で押され始める。

ラジャーターが援護に周り、カザリに殴り掛かる。

カザリはラジャーターの拳をはたくと反撃に移る。

ラジャーターはタジャスピナーでカザリの拳を受け止め、スピナーを回転させてカザリの腕を炎上させる。

その際にガタゴリバはカザリの顔面を殴った。

カザリは地面を転がり回る。

「いけるか・・・？」

コンボを使わずともカザリに勝てるかもしれない。

アंकは一瞬そう思ったが不吉な気配を感じた。

「雛！」

アंकは雛を抱き抱えた。

すると、アंकと雛が立っていた場所に緑色の電撃が落ちた。

アंकは電撃の発生源を探す。

そして、それはいた。

「俺もいるぞ！」

ウヴァだった。

ウヴァは辺りに乱雑に電撃を放つ。

特に誰かを狙っている訳でもなく、脅威にはなっていない。

アंकはそう考えた。

「ウアッ！」

「痛っ！」

しかし、ウヴァの電撃は戦闘に大きな影響を与えた。

ランダムに電撃が放たれているため、オーズは自由に動くことが出来ない。

その隙を突いて、カザリが確実にダメージを与えていく。
ウヴァとカザリの力を合わせた作戦。

当然カザリが考えた。

「そろそろくたばれ！」

ウヴァは頭に電気を蓄積させ、巨大な電撃の塊をオーズに発射した。

「危ない！」

ガタゴリバはラジャーターを庇い、ゴリバゴーンで防御の姿勢を取る。

電撃はガタゴリバに直撃し、ガタゴリバは緑色の電撃に呑まれる。

「うあああああああああ……！」

「映司！」

ラジャーターは崩れ落ちるガタゴリバの肩を支える。
そして、カザリは容赦なく攻撃する。

「終わり」

カザリが腕を振ると黄色の竜巻がオーズ達に向かっていく。

それに気付いたガタゴリバは再びラジャーターを庇って前に出る。

しかし、竜巻は非常に二人纏めて吹き飛ばす。

同時に、二人が使っていた六枚のコアメダルが空中に吹き飛び、二人の変身が解除される。

「があっ！」

「映司！映司！」

ぬえは映司に寄り添い安否を確かめる。
命に別状はなさそうだが、ダメージは大きそうだ。

雛も駆け寄り、四人が一カ所に固まる。

「くそっ！」

アंकは右腕を飛ばしてコアメダルを掴みに行く。
カザリとウヴァも跳び上がった。

三つの腕が交錯した。

アंकは信吾の体に戻ると、自分の掴んだメダルを確認する。

クジャク、ゴリラ。

それがアंकの掴んだメダルだった。

「フフツ」

カザリの手にはライオンとチーター。

「ハハツ」

ウヴァの手にはクワガタとバッタのメダルが握られていた。

アंकは舌打ちした。

何故カザリやウヴァがいるのか。

アंकは立ち上がり、二人から話を聞きだそうとした。

その時、ぬえは自分の手に何かが落ちたのを感じた。

「合図まで待て」

アंकは表情を変えず、ぬえと雛を見向きもせず、カザリとウヴァに聞こえないギリギリの音量で囁いた。

ぬえと雛はアंकの意図を理解して、黙って了承した。

「カザリ、どうしてお前らがここにいる」

「さあ。気付いたらここにいたよ。三日ぐらい前から」

アंकはそれを聞いて顔をしかめた。

「嘘を言うな、お前の気配なんざ全くしなかったぞ」

アंकの発言にカザリはニヤニヤ嘲笑った。

「コアメダルやヤミーは力を向きだしにするけど、僕達グリードはコアメダルを制御出来る。だから君でも気付けなかったんだよ」

「なるほどなあ。で、メダルが大方集まったからあの雑魚で俺らを釣ったって訳か」

カザリは肯定すると、手の爪を鋭く輝かせた。

「これ以上話すことは無いよ。君に情報を与えるのは危険すぎる」

「あと一枚で完全体だ。寄越せ!!」

ウヴァが襲い掛かろうとするが、アंकはニヤニヤと笑い始めた。

「お前ら、俺がグリード相手にするのに何の対策もしてないと思っただのか？」

カザリとウヴァの動きが止まった。

アंकは続けて喋る。

「俺が合図したら、お前ら今にメダル無くすぞ」

「嘘だね。君は僕らの存在を知らなかった。対策なんて出来るわけない」

「言ってる」

アंकはカザリを睨み、暫く黙り込んだ。
そして、ある時叫んだ。

「今だ！」

ウヴァはどこから来るのかと辺りをキョロキョロする。

しかし、カザリはアंकや映司達から目を離さない。

その時、雖は手から天に向かって弾幕を一つ放った。

カザリはそれに釣られて一瞬、視界を宙に向ける。

その隙を突いて、ぬえは立ち上がりながらメダルをドライバーに装填。

「貴様あつー！」

「くっ！」

グリッドが止めようとするが、それよりも先にぬえはメダルをスキヤンする。

「変身！！！！」

タカ！クジャク！コンドル！

タージャードル！！！！

「ハアツ！」

ぬえは自らに纏わり付く炎を薙ぎ払う。

そして、ぬえの姿が変わった。

空へと高く舞い上がるタカヘッドブレイブ

終わり来るまで止まらないクジャク

運命をクロスさせるコンドル

天を羽ばたき、相対する願いを具現化した炎のコンボ、仮面ライダーオーズタジャードルコンボが現れた。

タジャードルは背中にクジャクの光り輝く美しい羽を展開する。

タジャードルが両手を掲げるとその羽は宙に分離し、手を前に突き出すと同時にカザリとウヴァに襲い掛かる。

辺り一面に火花が飛び散り、カザリ達は身動き取れなくなる。

「おい、一旦退くぞ！」

アंकが退却を命じた瞬間、ウヴァが雛と映司目掛けて電撃を放った。

アंकは雛達を庇い、右腕を負傷する。

「アंक！」

タジャドルは背中から赤い翼を展開するとアंकをわしづかみにする。

「早く掴まって！」

タジャドルの指示通り雛はタジャドルの右手に映司を抱えてしがみついき、タジャドルは空へと飛翔した。

カザリとウヴァは撃ち落とそうとしたが、タジャドルのスピードに付いて行けず諦めた。

タジャドルはその場から離れるため、グングンスピードを上げた。

第5話Bパート・巫女とパワーと逆転コンボ

「・・・何とか、撒いたようだな」

アंकは椅子に座り込んだ。

四人はカザリ達から逃走し、人里の診療所に身を置いていた。

「本当は竹林の永遠停に連れていくのが一番良いんだけど・・・」

ぬえは口惜しげにしていた。

映司の怪我が酷く、また急ぎの逃走だったために竹林に行く余裕は無かった。

「今から行くにしても、どこにグリードがいるか分からないしね」

雛が呟くと、ぬえが立ち上がってアंकの元に歩いて行った。

「アंक・・・」

アंकはぬえを見ない。

ぬえは構わず話し出した。

「さっきの戦闘、私が映司の盾になるべきだった」

「ぬえちゃん、何言って・・・!?!?」

映司は起き上がろうとしたが、傷が痛んで布団に倒れる。

「・・・妖怪のお前なら怪我の治りも早い。確かに映司よりもお前がダメージを負うべきだったな」

「アंकまで！」

映司はアंकを責めたが、アंकは動じない。
ぬえは拳を握り締め、一度深呼吸するとアंकに告げた。

「皆はここにいて。メダル探しは私が一人です。」

映司と雛は驚愕したが、アंकは最初から分かっていたのか、静かに頷いた。

「映司は動けない。俺も負傷中。となれば、こいつしか今すぐ満足に動けるのはいない」

「だったら私が付いていくわ」

雛は同行を提案したが、ぬえはそれを蹴る。

「雛の紫のメダルは絶対に奪われちゃいけない。それに私がオーズになれない以上雛は映司の側にいて貰わないと」

「オーズに・・・なれない？」

雛はどういうことかアंकに尋ねた。

アंकはホルダーを開いて見せた。

「頭と胴体はまだまだあるが・・・足は俺のコンドルしかない。俺が怪我で動けない以上ぬえにメダルを預ける訳にはいかない」

「いざという時の為に、雛は紫のメダルで二人を守ってもらわないと」

ぬえは診療所を出ようとする。

雛はぬえを呼び止めた。

「待って！貴女も軽傷だけど怪我してるでしょう!？」

しかしぬえは立ち止まらない。

羽を広げて、飛ぶ体勢に入る。

アंकはぬえに伝えた。

「コアメダルの反応があるのは、ここから・・・あっちだ」

ぬえはアंकの指差した方角へ向かって飛んで行った。

「ここは・・・博麗神社じゃない」

ぬえは暫く飛行していたが、博麗神社を見付けると敷地内に降り立った。

博麗の巫女の真似ではないが、何となくここにメダルがある勘がしたのだ。

「霊夢ー、いるー？」

ぬえは博麗神社の巫女、博麗霊夢を呼んだ。
しかし、返事は無い。

と言っても、霊夢が面倒がって返事をしないのはいつものことなのでぬえは気にせず縁側に向かう。

「霊夢、ちょっとメダルを見なかつ・・・」

そこまで言った所で、ぬえは固まった。

ぬえの目に入ったのは、地面に膝まで沈んだ霊夢の姿だった。

霊夢はぬえを見たが、少しも表情を変えなかった。

「何か用？」

「いや、その・・・ええ？」

ぬえは何を言ったらいいのか分からず、あたふたする。

その時、何者かが空から降りてきた。

「おおーい、霊夢、いるかー？今日は凄いの手に入れて・・・何だこれ!？」

降りてきたのは黒白の服を着た普通の魔法使い。霧雨魔理沙だった。

「ねえアंक、本当に行かせて良かったの？」

雛はアंकに尋ねた。

「仮に引き止めてもじめじめ文句言うだけだろ。それよりコアメダルを回収させた方がいい」

アंकの物言いに映司は食い下がる。

「でも、あれじゃぬえちゃん一人の責任みたいじゃないか」

「お前は黙って体を休めてろ。いつまた力ザリが来るか分からないぞ」

映司は仕方なく眠りについた。
雛はアングの隣に座った。

「ねえ、怪我してて動けないって本当なの？」

「ぬえに行かせる為の嘘だ」

やっぱりか、と雛は呆れた。

大方そんなことだろうと思っていたのだ。

「一人で行かせて良かったの？」

「あいつ一人で十分だ」

アングが迷い無く言い切ったので、雛は驚いた。

「珍しいわね。貴方がそんな信頼するなんて」

「そうじゃない。あいつも映司と同じ・・・メダル集めの才能がある」

アングは布団になっところがって話し続けた。

「コンボに耐えてるのもそうだ。オーズになったからにはそれなりのメリットがあるはずだ」

アングがそこまで話した所で、突然診療所の中に誰か入って来た。

そこには咲夜がいた。

映司達を見ると一礼し、後ろに連れていたレミリアを中に入れた。

「何だか迷惑を掛けたようだから、謝りに来てやったわ」

「いらん、帰れ」

胸を張って威張ったレミリアをアंकは一蹴し、さっさと追い返そうとする。

レミリアはムキーツとアंकに突っ掛かるうとするが、咲夜と雛がそれを止める。

「火野さん、怪我してるようですね」

「ええ、ちよつとね・・・」

咲夜は映司が怪我をしていることに気付き、雛は詳しく説明すると長くなるので説明はしなかった。

「宜しければ私が手当てしましょうか？」

「いや、でももう治療して貰いましたよ？」

映司は断ったが、咲夜は手当ての準備を始めた。

「まあ、任せて下さい」

一方、博麗神社では、ぬえと魔理沙が霊夢を地面から引き抜こうと
していた。

二人で霊夢の腕を引っ張るも、少しも成果は出ない。

「駄目だ、全然上がんねえ」

魔理沙は手を離して手の平にフーフー息を吹き掛ける。

「重いー……」

ぬえもドスンと地面に座り込む。

霊夢は慌てることなく、二人に話し掛ける。

「放っておいて構わないわよ」

霊夢の発言に二人は一瞬啞然としたが、その後魔理沙は嘖き出した。

「おいおい霊夢、とうとうぼけちゃまったのか？」

魔理沙はケラケラ笑っていたが、霊夢の光の抜けた虚ろで真っ直ぐな瞳で見詰められると、笑うのをやめた。

「……私が死んでも、代わりの巫女が来てそれで終わりでしょう？ そんな必死になる必要は無いわ」

「……なあ、これは一体何だ？ 霊夢は毒キノコでも食ったのか？」

魔理沙はぬえにひそひそ話し掛けた。

ぬえも声を潜めて話し掛ける。

「コアメダルの影響で、欲望が制御出来なくなってるはずだから……」

「おいおい、霊夢は地面に潜りたい欲望でも持ってるってか？」

魔理沙はおどけた感じで言った。

確かに変だし、何よりコアメダルを霊夢が持つてるかどうかも確かめていなかった。

ぬえは念のためポケットからセルメダルを取り出して霊夢に見せた。

「ねえ霊夢。これと色違いみたいなメダル拾わなかった？」

「……今朝、二枚拾った」

霊夢が答えると、ぬえはやはりコアメダルか、と思った。

魔理沙はセルメダルに怪訝な表情を浮かべたが、霊夢の肩を揺さ振る。

「ほら霊夢。やさぐれてないでさっさと出てこい」

「……構わないで」

霊夢は相変わらず魔理沙の顔を見ない。

魔理沙は頭をガリガリ搔いて、霊夢の腕を強引に掴んで引っ張る。

「お前が真面目に悩んでると何か背筋がゾクゾクするんだ。やめてくれよな」

「そうそう、似合っていないって」

二人は再び霊夢を引き上げようとする。

「……何で、どうして？私を助けたって」

霊夢は魔理沙に真意を問い、魔理沙は迷い無く答える。

「博麗の巫女にはいくらでも代わりがいるだろうさ。でも今私の目の前にいる博麗霊夢はお前一人しかいないだろうが」

「……」

「頼むよ。例えば他の妖怪がお前のこと忘れても、私はお前との思い出を胸に刻み付けてやるから」

魔理沙がそう言うと、霊夢は目尻に涙を溜め、フルフル首を振った。

「嘘。魔理沙は人間なもの。妖怪より早く死ぬわ」

「だったら尚更だ。私が死ねば私が霊夢のことを覚えて、大切に思っていたことは永遠に変わらなくなる。その証になる」

魔理沙は霊夢の涙を指で拭くと、その頬をぺちぺち叩く。

「さ。いい加減浮き上がれよ。メソメソ泣いてんのはお前らしくないって」

「そうそう。何があっても顔色一つ変えずに澄ました顔してる方が霊夢っぽいよ」

ぬえと魔理沙はニツと笑う。

その顔を見て、霊夢は涙を拭い、地面から抜け出そうとする。

そして、霊夢は地面から勢いよく飛び出した。

三人は地面に倒れ込み、魔理沙とぬえは霊夢の下敷きになる。

「・・・全く、好き勝手言ってくれたわね」

霊夢は魔理沙をジツと睨みつける。

魔理沙は笑いながら頬を搔く。

霊夢はため息を漏らすと自分の足に張り付いていたメダルをぬえに

突き付ける。

「あげる。迷惑だからさっさと持って行って」

ぬえはそれを受け取ると、まじまじとメダルを見詰める。

そこで魔理沙はあつと声を挙げ思い出した様にポケットを探った。

そして、一枚のコアメダルを取り出した。

「すっかり忘れてた。これ見せびらかしてやるうとしてたんだ」

「先に言つてよ・・・!？」

ぬえが脱力すると、遠くから重く大きな音が鳴った。

何事かと辺りを見渡すと、人里の方から聞こえたらしく、ざわざわと動物達が逃げて来ている。

「早速異変みたいだぜ？」

魔理沙が霊夢に言うよりも先に、霊夢は人里に向かって飛んで行った。

「映司・・・」

ぬえは人里に映司がいることを思い出し、一目散に飛び立った。魔理沙もやれやれと後を追い掛ける。

ぬえ達が霊夢を引き出す少し前、映司は大分回復していた。

「凄いですね。一体どうやったんですか？」

「それは秘密です」

咲夜はお茶を濁してごまかすと、レミリアの側に戻った。

レミリアはアंकといがみ合っていたが、何か思い出したのか手をポンと叩いた。

「そうそう、あんた達のコアメダルだけど、うちのパチュリーが見てみたいって言ってたわ」

「誰だ？」

アंकはパチュリーが何者なのかレミリアに尋ねた。

レミリアはざっとパチュリーの説明をし、その理由を話した。

「以前私がコアメダルを使っている時にね、途中から暴走しちゃったじゃない。パチュリーはその一部始終を知っている」

「途中から？」

「いや、最初からね。うん。そうね」

レミアは一瞬ギクツとしたが、すぐに平静を取り戻して話をこまかした。

「とにかく、あんた達に会いたってパチュリーが」

その瞬間、映司達は建物が崩れる音を聞いた。すぐさま診療所を飛び出し、辺りの様子を探る。

すると、十数匹のクズヤミーが群がっていた。建物を壊したのはこいつらだろう。

「映司」

アंकは映司にメダルを渡す。

映司は三枚のメダルをオーズドライバーに装填し、変身する。

「変身！……！」

タカ！トラ！コンドル！

映司はタカトラドルに変身し、クズヤミー達に向かっていく。

トラクローを展開し、クズヤミーを引っ掻いていく。

同時にコンドルレッグも使い、赤い閃光を宿しながらクズヤミーを薙ぎ倒していく。

赤と黄色の閃光が乱舞し、戦場を駆け巡る。

スキヤニングチャージ!!!

タカトラドルは勢いよく回転し、周囲が竜巻と化す。

「セイヤーッ!!!!」

そして、竜巻の中から赤と黄色の爪の斬撃が次々と飛ばされ、クズヤミーを撃破していく。

そして、全てのクズヤミーが消滅した。

その時、カザリが不意を突いて奇襲をかけてくる。

タカトラドルはトラクローで爪を受け止め、反撃する。

カザリはトラクローをかわし、タカトラドルを突き飛ばす。

「オーズ、アंक。残りのメダルも、貰うよ」

カザリはアंकを挑発し、タカトラドルは起き上がってカザリを睨

む。

「無駄だよ、アंकがメダルを投げて僕が通さない」

カザリはオーズとアंकの間に立っている。

これではアंकがメダルを投げてカザリに取られるだけだ。

カザリは勝利を確信し、オーズに歩み寄ろうとする。

その時、タカトラドルはトラのメダルを引き抜き、腰のメダルケースからメダルを取り出す。

カザリはそれに驚いた。

「どうして!？」

「お前、俺が本当に何の対策も打ってないと思ったのか？」

アंकはうるたえるカザリを嘲笑う。

そして、映司はメダルをセットし終わるとメダルスキャンでコンボチェンジする。

タカ!クジャク!コンドル!

タージャードル!!!!

「ハアッ!」

周囲に集まる炎を薙ぎ払い、映司はタジヤドルに変身する。

「…………おお」

レミリアはタジヤドルの赤く輝く姿にみとれた。

タジヤドルは胸のオーラングサークルから左腕にタジヤスピナーを召喚し、カザリに接近する。

カザリの爪とタジヤスピナーがぶつかり合い、火花が飛び散る。

タジヤドルの蹴りがカザリの腹に決まり、追い撃ちをかけるタジヤドルの顔をカザリが裏拳で殴る。タジヤドルが怯んだ隙にカザリは飛び込んで引っ掻こうとするが、タジヤドルはスピナーから火球を数発発射してカザリを撃ち落とす。

接近戦を仕掛け、二人の殴り合いが始まる。

タジヤドルの拳がカザリの顔面にヒットし、続けて炎を纏わせたスピナーを腹にぶち込む。

そして、よろめくカザリに手から火炎放射を喰らわせ、カザリは吹き飛んだ。

その際カザリの体からコアメダルが飛び出し、アंकはそれをキャッチする。

カザリが落としたのはライオンのコアだった。

「ハッざまあみる・・・映司、このまま一気に決める！」

アングの指示通り、タジャドルはカザリに接近する。

その時、二体のヤミーがタジャドルの行方を遮った。

ネコヤミーとシャムネコヤミーだ。

カザリが万が一の為に用意しておいたようだ。

二匹のヤミーがタジャドルに襲い掛かる。

タジャドルは二匹のヤミーを蹴り飛ばすが、その隙にカザリがタジャドルの胸を爪で突き刺す。

タジャドルは火花を散らして突き飛ばされる。

飛び込んで来るネコヤミーを火炎放射で押し返し、カザリをスピナーで突き飛ばす。

背後から不意打ちするシャムネコヤミーを火球で撃墜し、カザリを蹴り飛ばす。

その時、二匹のヤミーが同時に飛び込んで来る。
タジャドルは上空に飛んで回避する。

それを読んでいたカザリは腕を振って突風を放つ。

風に飲まれたタジャドルはバランスを崩し墜落する。

襲い掛かってくるネコヤミーを蹴り飛ばし、シャムネコヤミーを火炎放射で押し返す。

カザリの振り下ろす爪をスピナーで受け止め、格闘を繰り広げる。

カザリとシャムネコヤミーが同時に爪で突き刺そうとし、タジャドルは両手で何とか受け止める。

ネコヤミーがタジャドルの背後からエネルギー弾を放ち、タジャドルは直撃してしまう。

怯んだタジャドルをシャムネコヤミーは爪で引つ掻き、カザリは至近距離で竜巻を放ち、タジャドルは勢いよく吹き飛ばす。

体勢の整っていない隙にカザリは更に追い撃ちを掛ける。

タジャドルはスピナーを突き出し、爪とスピナーが互いの体に直撃する。

カザリとタジャドルは正反対に吹き飛んだ。

オーズドライバーからメダルが弾け飛び、空中に舞い上がる。

アंकは即座に右腕を飛ばし、メダルを回収する。

しかし、アंकの手にはタカとクジャクのメダルしか握られていない。

「もう一枚はどこだ!？」

アंकがメダルを探していると、カザリが不敵に笑いながら立ち上がる。

そして、その手にコンドルのメダルが握られていた。

「アंक、オーズ。終わりだね」

カザリと二匹のヤミーがジリジリと近寄ってくる。

その時、カザリ達の周りを結界が囲んだ。

「・・・何?これ」

カザリを結界を作った人物を探る。

そして、カザリ達の目の前に霊夢と魔理沙が舞い降りた。

「・・・」

「そこまでよ、妖怪」

「ちょっと大人しくしてくれ」

カザリは慌てるヤミーをよそに霊夢を嘲笑う。

「邪魔しないで欲しいなあ」

カザリが結界を攻撃すると結界に衝撃が走り、霊夢の顔に苦悶が走る。

「映司！アंक！」

ぬえが映司とアंकの側に着地する。

「遅いんだよ」

アंकの愚痴にぬえはクスツと笑い、霊夢と魔理沙から貰ったメダルを見せた。

ゾウ、ウナギ、タコ。

その三枚のメダルが今日受けとった物だった。

アंकはホルダーからメダルを取り出し、映司とぬえに渡す。

「ぬえ、映司にゾウを渡せ」

ぬえは映司にメダルを投げ渡し、映司はそれを掴むとドライバーに装填する。

そして、二人は同時にメダルをスキャンして変身する。

「変身！！！！」

サイ！ゴリラ！ゾウ！

シャチ！ウナギ！タコ！

サゴーズ・・・サゴーズ！！！！

シャシャシャウタ、シャシャシャウタツ！

二人の姿が変わり、オーズに変身する。

迫る暗闇を突き破るサイ。

重く響くpower、ゴリラ。

怒りを飲み込むゾウ。

海のように構えるシャチ。

しなやかに心をシビれさせるウナギ。

型などに捕われないタコ。

映司は灰色に輝く大地の王、サゴーズコンボ。

ぬえは海を自由にmovementする、シャウタコンボになった。

サゴーズは雄叫びをあげながら胸をゴリバゴーンでドンドン叩いた。

ける。

シャウタはタコレッグを八本に増やし、シャムネコヤミーを何度も何度も蹴り続ける。

サゴーズはネコヤミーの頭をわしづかみにし、逃げられないようにして腹に頭突きをぶち当てる。

そして、苦しむネコヤミーを地面に叩き付け、何回か殴ってから蹴り飛ばした。

ロケットパンチを発射し、ネコヤミーを突き飛ばす。

「お前ら、今すぐ決めろ！」

アंकは二人に命令する。

もうコンボの負担で倒れてもおかしくない。

それを察したサゴーズはアंकの指示に従う。

スキヤニングチャージ!!!

サゴーズは両足を揃えて垂直に跳び上がり、足底に灰色のエネルギーを溜める。

地面に着地すると灰色の輪がネコヤミーを捕捉し、地面をえぐらせながら自身の元へ引き寄せる。

ネコヤミーを助けようとシャムネコヤミーはサゴーズに飛び掛かる。

スキヤニングチャージ!!!

「ハッ！ヨイシヨツ!!!」

シャウタが液化化して空中に飛び上がると電気ムチでシャムネコヤミーの体を縛り、自分の元へ引き寄せる。

そして、足を八本にしてドリルのように回転させながらシャムネコヤミーに突っ込む。

シャムネコヤミーは体をえぐられながら落ちていく。

サゴーズは両腕と角に灰色のエネルギーを溜め、どっしりと構える。

「「セイヤーツ!!!」」

そして、サゴーズが攻撃した瞬間にシャムネコヤミーが押し込まれ、シャウタとサゴーズの必殺技がヤミーを板挟みにする。

シャウタのオクトバニッシュ、サゴーズのサゴーズインパクト。

二つの技によって二匹のヤミーは爆発してメダルとなった。

「すっげー」

魔理沙はシャウタの動きに感心し、霊夢はサゴゾの力に静かに心惹かれた。

煙が晴れ、中にはサゴゾとシャウタが向かい合って立っていた。

そして、変身を解除して元に戻ると、映司とぬえは同時にその場に倒れ込んだ。

「火野君！ぬえ！」

雛は倒れた二人の元へ駆け寄った。
アंकもその後を、ゆっくり歩いて付いていく。

人里に、再び平穩が訪れた。

集まったメダルは

タカ 二枚

クジャク

コンドル

ライオン

トラ

カマキリ

サイ

ゴリラ
ゾウ
シヤチ
ウナギ
タコ
プテラ
トリケラ
ティラノ

一行のメダル回収は続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1104w/>

東方核争奪-仮面ライダーオーズが幻想入り-

2011年10月1日16時55分発行